

## 資料編

### 1. 支援事例の概要

以下は調査で把握された支援事例の概要をご理解いただくための資料として作成したものである。実際には74事例が把握されたが、それぞれの団体等の方針、あるいは、支援者と対象者の関わり方等からくる事情によって記録を同一の形式で記載することはできなかった。また、すべての事例を記載しているわけではない。

#### 事例1

年齢等 男性 20代前半 大卒 学力的には問題ない(中の上)

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 営業職についていたが、ノルマがあり、合わないということで数年勤めて辞めた。

もともとやりたいことはあったが、それを仕事にするのか、それとも別の仕事にするのかというのか、そもそも決めたとしてもそれがあっていなかったらどうしようというのが最初の悩み。コミュニケーション能力は低く、自分の思ったことを言わずにやめてしまう。伝えることを怖がっている。分からなくても聞き返さない。友達は少ない。体力は普通、生活習慣も大丈夫。やったことのない仕事をできないと決め付けるところがある。前の仕事があり、学生時代はコンビニなどでアルバイト。一人暮らしをしており、お金がないこともあり、食べていかななくてはならないという意識がある。その中で、少しでも自分に合った仕事に就きたい。安定所に行ったり、インターネットでみたりしていたが、面接には行っていなかった。辞めた事は知っていたが、それほどのプレッシャーはない。

**支援者の数等** 最初は12人のキャリアカウンセラーのうち1人が、随時、本人が来所したときに対応していた。来所2か月して、担当を本人に決めてもらった。最初は週に3日くらい来ていたがその後2週間に1度くらい。

**支援内容** 昨年6月から11月くらいまで支援。9月末にいったん内定をとったのに断った会社があり、その時点だけ1か月くらい中断した。本人がこの団体はどんなところだろうと来所し、カウンセリングを受けたことから始まった(本人は、カウンセリングは正しいアドバイスをもらえるものだと思っていた)。そこで、自分がやりたいことは何かを考えてもらった(仕事についてどうなるのか、履歴書の添削、面接の実習などを一緒にやる。相手から見たら自分の面接の様子はどうかを考える)。その結果、人の話を分からないときは分からないといえるようになり、どうしたらいいか決めてほしいという構えがなくなり、自分で考えて自分で行動することに気付いた。人に言われて仕事を決めてもうまく行かないので、自分で決めて絞り込むということができるようになった。キャリアアカウンティングに当たっては、団体のスーパービジョンがあった。

**顛末** 支援の結果、インターネットで見つけた製造業の仕事に就いた。コミュニケーションを使う

部分が少なく、手先の器用さが生かされている。4ヶ月は続いているという連絡をもらった。

**支援のポイント** 支援者は、多くの仕事を知り地域差を知ること。対象者と一緒に取り組んでいく姿勢。相手の癖を知って同じところに戻らないようにする。自分で考えるようにというサポート。

## 事例2

**年齢等** 男性 20歳 学力の低い高校の卒業。読み書き、計算はできる。

**来所理由** アルバイト経験（中古書店）しかないのだが、突然、正社員になりたくなくて相談に来た。

### 経過

**当初の様子と支援者の見立て等** 無料相談に来たことで、かかわり始める。おとなしくて自己主張ができない。アルバイト経験（中古書店）しかないのだが、突然、正社員になりたくなくて相談に来た。アルバイト経験しかない安定所においても仕方がないと思い込んでいた。

**支援内容** アルバイトと言っても、正社員並みの仕事をしていることに気付かせて、職務経歴書をつくり、自信を持ってもらった。

**顛末** 安定所にいけるようになり、工場での生産管理の仕事を見つけた。家族はどちらかという、放任的。相談は3日（都合、2か月）。

**支援のポイント** 支援者に必要なのは、メンタルな要素を持っている人の対応。医者にみてもらうしかないが、知識をきちんと持つておくこと。

\*メンタルな要素とは、精神疾患だけではなく人格障害領域も含むかどうか確認したが不明。

## 事例3

**年齢等** 男性 16歳 中卒 小学校から不登校

### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 小学校高学年ほどの読み書きもできない 漢字が書けない。LDではない。体力問題なし。コミュニケーション能力あり。職業経験なし。フリーターしながらでも何とか食べていけると思っていた。仕事は探していなかった。責任ある仕事をやりこなすことを目的にしていたが、そもそもやれそうだという見立てを持っていた子（フリースクールでよく見ていて、安心感、信頼感のある子）だった。

**家庭** 父親はフリーター、母親はパート。働くということが大事でない家庭。本人は家族を見て「あれでも働いていけるんだ」と思っていた。親も子どもが食べてさえいければよいと思っていた。

**支援者の数等** 支援を行なったのは、スタッフ9人に加え、ボランティア。そのうち核となるのは、自立塾のスタッフ4名、フリースクールの1名と代表。自立塾のスタッフ4名は、パン屋に2名、本部に2名の配置。ほかに農場に2名いる。団体が設けるパン屋（M市）では6人から12、13人のほどの面倒を見ており、農場では2～5人ほどの面倒を見ている。

**支援内容** 2005年10月19日から2006年1月20日まで。中断なし。もともとフリースクールに通って

いて、若者自立塾が始まったときに、「次の自分を創りたい」、「外に出たみたい」という理由で参加した。まず、農場に行き、朝起きる、朝飯作る、働く、夜寝るという生活自立を、1ヵ月半行なった。そしてM市に戻ってきて、配達を担当し、責任感を養った。その後、お金を稼ぎたいという理由で、求人誌の求人広告を見て、ファーストフードでアルバイトを始めて現在に至っている。なお、(小中学校生の)フリースクールのサブ・スタッフとしても活動している。農場に行った当初は、6時に起きることができず、無理やり起こすことはあったが、大きな問題はなかった。

**顛末** 仕事をするようになった。アルバイトではファーストフードでなんで食べ物を捨てるのかとか(パン屋はスローフード)、人間関係の緊張もあったようだが、毎日仕事のあとの集まりで話をし慣れてきている。外でも働けるという自信が支援の成果。

**支援のポイント** 場の持っていた教育力でなんとなかったもので、支援者個人の技量についてどうこうはない。距離を取れること。チームを組んでおり、対象者を複数の角度から見れること。いずれも抱え込まないことにつながる。

#### 事例 4

**年齢等** 女性 19歳 通信制高校卒 調理の専門学校中退

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 高卒以上の学力はあった。数学は苦手。体力はない。生活は昼夜逆転 挨拶はにこやかに返せるのみ。「自分から挨拶できるようになろうね」が最初の目標。職業経験はゼロ。本人はまだまだ自分は働けないと思っていたが、自立塾には入ってきた。インターネットでパン屋を見ていたら、若者の支援をする変なパン屋を見つけたというのが動機。仕事は探していなかった。

**家族** 家族の考えはよく分からないが、通える場所ができてうれしいという反応だった。親子の仲はよい。

**支援内容** 2006年1月から7月まで。最初2週に1回だけ、県外から通ってきていた 次いで、週に一泊になり、その後泊まるようになった。泊数で3ヶ月を満了したので卒業。上記のとおり、本人がインターネットで調べてきた(若者自立塾を調べたわけではなく、パン屋として調べた)。

週一日でも通ってくるところから始めた。パンを袋に詰めるところでパンの名前を覚えて、商品知識をつける。調理の学校にいたことから、カスタードクリームを作ってもらった。当初は、棒立ち状態。手先は器用で飲み込みも早い、不安で動けない。パンの袋の縛り方一つでもこれでよいかと聞いてくる。一つ一つOKだよと行ってあげなければいけない。「しんどくってもやることやればいきていける」と言ってあげてがんばってもらった(この言葉は、多くの子どもに使っている。聞いてあげるのは大事だが、時間を決めて聞いてあげ、僕は解決して上げられないよとはっきり伝える)。どこかでいじめられ経験があったのかもしれないが分からない(特に触れるようなことはしない)。

**顛末** 今も、パン屋でアルバイトをしており、徐々にアルバイトの量を増やしている。以前の住所

からこの近くに越してきた。

**支援のポイント** 声が出る、聞ける、自分から要求する（仕事量が多すぎるとか）を目的としてきたが、これができるようになったのが成果。

#### 事例 5

**年齢等** 男性 24歳 四大卒

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 東京で、中国相手のベンチャーの正社員になるが、いじめに遭い、そのあと、三島の菓子屋に出向させられるが、そこでもいじめに遭い、結局、一年足らずの就労で引きこもり。その頃、甲状腺の病気も発症。今も、すぐに熱が出る。本人は、甲状腺の病気のせいだと思っているが、心因性かもしれない。コミュニケーション能力はある。ただし、潔癖過ぎるところがあり、他人にも自分にもきつい。しかし、気は弱く、引いておどおどする。働けない自分ではダメだと思い込んでいる。だが、失敗経験から働くことは怖いと思い込んでいる。地域でも、あの子は四大までいっているのという声があったそうだ。

**家族** 親は働いてくれといい、本人は返し言葉で、どこかで支援してもらおうといい、若者自立塾という仕組みを見つけて、何カ所か見学して、職員が優しくそうだという理由でここを選んだ。

**支援内容** 2006年4月から8月まで。ずっと寮にいた。まず、パン屋に入り、その後福祉に関心を持ち出したので、地域のボランティアセンターに出入りし、ボランティアを始めた。スタッフは、毎日話を聞いてやった。ちょうど、8月はじめに民間のボランティア・ステーションを始めた人がいて、そこで1ヶ月間のアルバイトをするという話がまとまり、自立塾は卒業とした。

本人の難しさは潔癖さだが、人の話を聞くなど面倒見もよく、他の塾生から信頼されるようになった。本人は重荷でもありうれしくもありといったところか。神経症的というか細かい人だが、保育園で、子どもにコケにされたと落ち込んでいるときに、ほかの塾生から、それはよいことだよと話をしてもらって持ち直したり、少しずつ修正されている。

**顛末** 9月半ばから、午前中は保育園での補助のアルバイトをしており、午後は文部科学省の事業で、専修学校と団体が組んだ、無償のプログラムでPCを学んでいる。

#### 事例 6

**年齢等** 男性 20歳 中卒 高校は行っていない。

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 中卒後、1年間ほど、スーパーでアルバイトをしたが、結局なじめず、引きこもり。学力のバランスは悪い。社会への関心は高く、トータルとしては賢い。体力はなかったが、農場ですぐに回復した。生活習慣も昼夜逆転していたが、すぐに治った。コミュニケーション能力はあった。とにかく家を出たい、自立したいので、働くのは当然と考えていた。

**家族** 本人の問題は、家庭の問題からきている。父が離婚していないだけでなく、(本人も以前か

ら疑っていたが) 本人自身は別の男性の子ども。母親とも兄弟とも口をきかず、家を出たかった。本人は、住み込みで出られるところとして、北海道の牧場のようなところを想像していて、当該団体が農業をやっていることを知って、家の近くなのに農業ができて住み込みなので惹かれたよう。一度やってきて、見て入ることを決めた。支援を求めたのは、母が探した情報による。その意味でも母が本人が家を出るしかないと思っていた。とにかく、親に対する不信が、本人の行動に大きな影響を与えていた。

**支援内容** 2005年10月から1月まで。まず、1ヶ月くらい、農場で働き、人間不信が強かったので、共同作業を通じてゆるやかな人間関係を体験してもらい、徐々に回復してもらい、「ここはいいところだ」と思い始めてもらった。この過程で話し方が変わって行き、「まあ、そうでしょうね。」といった、本心を見せない、さめた話し方がなくなっていった。その後、パン屋に移り、非常によく働き、これまででただ一人、パンが焼けるまでになった。パン屋では朝から晩までひたすらよく働き、休まないし、当てになる労働力なので、仕事を与えていくうちに、伸びていった。卒業時期になって、外に出ようという話をして、安定所に連れて行ってもなかなか出ようとしないので、3ヶ月間居残りアルバイトをしてもらった。本人は、ずっとここでよいと言っていた様子。支援をする上での困難はなかったが、同じ世代には心を開いていない(友だちを作る様子はない)。引きこもりの対人恐怖のあるメンバーとは異なっており、自分とは違うから、深く関わらなかったのかもしれない。本人のほうが内面生活ができている大人だと思う。

**顛末** 今は、工場でのアルバイトをしているが、1年間ちゃんと働けば正社員にしてくれる予定。この職場は、中小企業家同友会の東京支部の事務局と連携して探してもらった。社長は熱心だし、今は、中小企業も持ち直して人がほしい。昨晚電話して続けられそうかと聞いたら、やりますと言っていた。電話は1ヶ月に一度位している。

**支援のポイント** 人間信頼をどう回復していくかで、否定しないスタンスを取りながら、違う世界を見せるということを繰り返した。ほかの子供たちの話し合いの場につれてくるとか。とにかく、もともと家を出なければならぬし、働ける子だと思っていたので、彼の能力・努力を評価してくれる場所と出会さえあれば何とかかなと思っていた。

## 事例7

**年齢等** 女性 19歳 通信制高校卒業

### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 学力は不明。そう高くはない。言葉も少ない。書き言葉も幼い。食が細く、やせている。自分からは話さず、コミュニケーション能力は高くない。アルバイトをちょこちょこしていた。とにかく家を出たいと考えていた。東京の自立塾に行けば、東京で自活できるのではないかという考えもあった。とにかく住み込み(特に、仲居さん)という考えがあった。安定所に行っていた。若者自立塾のチラシもそこで見つけた。

**家族** 何年間も家族とは会話がなかった。全員が口をきかない。本人に対しても腫れ物に触るよう

に接していた。その結果、本人も家を出たいという気持ちだった。

**支援内容** 2005年12月暮れから3月まで。東京に出たかったという感情もある。地方の生きづらさもある。家から出たいのに、地方には仕事もない。会話に務めた。そのほか、ご飯を作る、ご飯を食べるといった、生活補助。パン屋では店舗で働いてもらった。話すのは本当は好きで、単に、話していなかったので話せなかつただけ。最初は、一対一から、段々と話すようになっていった。孤立無援だったところ、話を聞いてもらえる、信頼できる大人がいるということに気付いていった。

**顛末** 就職は、安定所を通じて郷里の職場を探した。仲居の仕事に就職したが、一週間と持たずやめた。そのあと、自分でレストランのアルバイトを始めた。家から出たいが、その気持ちは以前ほどではない。親子の会話も増えている。郷里に帰る度に、少し話せたかもなどと言っていた。少し働けるようになった。

**支援のポイント** 話すのは本当は好きで、単に、話していなかったので話せなかつただけなことがわかり、会話に務めた。

## 事例8

**年齢等** 女性 21歳 中学不登校 高校中退

### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 学校に行っていないので基礎学力は分からないが、賢い子。字もかけるし、計算もできる。対人恐怖で、コミュニケーション場面では緊張が高い。いじめられた体験があるのかもしれない。体力はあった。生活習慣も問題はない。アルバイト経験なし。母親が、自分としてはこの子に何もしてやれないと言って連れてきた。

**家族** 離婚家庭。母親が精神疾患で、父親は家を出ている。祖父母に育てられ、祖父はすでに死去。母親は自立してほしいと思っていた（自分は病気だし、祖母しか残っていない）。

**支援内容** 自立塾自体での経験は、2006年1月から4月まで。それ以前に、引きこもりの支援をするパン屋ができたという新聞記事を見て親が連れてきた。週一回から始めて、就労体験をしながら、引きこもりからの回復をしていたが、若者自立塾が始まったので、本格的にやるかという話になり、ほぼ連日来るようになった（自立塾だが通い）。パン屋の仕事を丁寧にバージョンアップしてきて、最初は、パン屋には関心はなかったが、おもしろいと思ったのか、はまった。今は店舗を任せられる。人に教えることもできれば、外へ一人で売って売り上げの出納簿をつけることもできる。問題はなかったが、「やれ」というとやってしまうので、無理をさせないことが大事。自信を持っていくにしたがって、対人的不信が解消されて、働けるようになって来ている。体験発表の機会でも、不登校から就労体験への経緯について何百人もの前で話ができるようになっている。

**顛末** 今は、パン屋でアルバイトをしてもらっているが、次にいけそうなステップになっており、今月から、1か月単位で専修学校にPCを習いにいき始めた。会計事務ソフトでも身につけたら、就職試験を受けてもらおうかと思っている。

**支援のポイント** 能力はあるし、「やれ」というとやってしまうので、無理をさせずに対人不信を解

消したこと。

#### 事例 9

年齢 30歳

性別 男性

学歴 高校卒業

学力 学力は高い。英文原書購読、パソコンはシステム開発

来所理由 フルタイムのパソコン会社で過労、燃え尽き

#### 経過

**当初の様子** 広汎性発達障害（アスペルガー）の診断がなされており、疲れやすく、顔に出た感情を理解するのが難しく、対人コミュニケーション能力が苦手な苦しみ。最初に会った6月から9月まで一言も話さず。内側に鍵がかかっている、扉をあける鍵と、ドアノブが向こう側の部屋の内側にあって、外側からは、つるつとした壁のような感覚を受けた。生活習慣としては病院を何回も入退院していたため、病院の通院が苦痛で、当会が発足したときに、病院に行かなくて済むんだったらこっちへ行きたいということを親に言った。「なぜ」と聞いたところ病院のデイケアは単純でつまらないということだった。

自殺未遂を2、3回繰り返した後だったので、混乱している、死にたいとだけ言っていた。就職のための仕事探しはまったく行っておらず働く意志はなかった。

ひとり暮らしだったので慰めで動物（かぶと虫、フェレット）を飼っていた。かわいがり愛着を持つが、ストレスがたまると天井にたたきつけて殺していた。

**家族** 両親は離婚し母子家庭だったので、家族は働いてほしいと切実に思っていたが、それ以上に、死んでほしくないという思いが強かった。本人は、二度とパソコン関係の仕事はつきたくないと言っていた。メンタルな部分で父親との関係がよくなかったため、それが本人の中の困難を生んでいる思った。就労に関しては、母親が一人で苦勞しているの、働かざるを得ないのに働けないという葛藤があると感じた。働いてもらわないと生活が大変ではあるが、一定期間、休職期間をおかないととても無理だということを母親、姉ともによくわかっており、本人の生活をバックアップしてくれた。母親、姉ともに家族会に参加してくれ理解があった。

**支援者の数** 実質1人が担当

**支援者の見立て** ①知能レベルは高い、②コミュニケーションが最も問題

**支援内容** 働きたいということで、母親と同じ外食産業で1週間働いたがだめだった。

次に、市民フォーラムのパソコンのボランティアをしてもらったが結構うまくいき、自分がやれることがあると自覚するようになった。パソコン購入、ホームページ作成などアドバイザーになってくれた。6月から会って、9月から結構元気になって、このレベルでやれるのなら、もう一遍仕事に戻ろうかなと言ったのがおよそ翌年の春夏ごろだった。その後、小さな会社で、パソコン販売、システムなどを扱う業者向けのところで働いたが3カ月でやめた。そこからは薄い関わりになった

が、その前後に恋人ができて紹介された。その職をやめたころ、親の許しを得て同居するようになり、昨年9月に結婚した。結婚1年前に、障害者枠でエレベーターの検査の仕事についた。「なぜそこで働いたの」と聞いたら、「何も使わなくていい、見ていればいい。給料は安いけれども、障害者枠で働ける」と言っていた。当初、障害者と言わずに、まずは働いて、その後、実は手帳を持っていると言って、障害者枠にしてもらったので重い労働はなく、すでに3年間働いている。

**顛末** 障害者の市営住宅（家賃3,000円）に入り、配偶者もアスペルガーで障害者年金（2人で20万弱）をもらっている。障害者年金をもらうことを嫌だと彼は言ったが、私は「そちらがいいんじゃない」とは言い、最後はそれを選択した。女性を好きになったことがないと言ったのに、何で好きになったのか不思議だが、わかり合えるということかもしれない。支援としては約1年で、最初の会社で働くところまでであった。

**支援のポイント** ①家族の理解を求めたこと、②本人の興味、能力、適性に応じた仕事を斡旋し自信を持たせたこと、③障害者年金などの公的扶助の利用を促したこと

#### 事例10

**年齢** 24歳

**性別** 男性

**学歴** 大学中退

**学力** 特に不自由さは感じなかった。

**来所理由** 統合失調症のリハビリのための通所を両親（父親）が希望

#### 経過

**当初の様子** アルバイトの経験もなし。

**家族** 就職することについては、父親は理解があるように見えて陰で働くことを強く要求されていると言っていた。だから、働きたい、もしくは一人で暮らしたいとよく口にしていた。父親が主体的に関わる。母親はうつ病で無理解で協力は難しかった。

**支援者の数** 実質1人が担当

**支援者の見立て** 体力、生活習慣、対人関係には問題なし。

**支援内容** 通所している3、4カ月でとても状況がよくなり元気になったので、「どこかでボランティアをしたい」「何かほかでやれることはないか」と言われて、週1回から、最後は週3回から4回、高齢者ホームのボランティアとして掃除や雑務にかかわるようになった。ボランティアではなくアルバイトをしたいと言い「力仕事は僕得意だから」とスーパーマーケットの青果部門を見つけてきて生き生きしながら半年働いた。

**顛末** 高齢者ホームのボランティアの記憶がよかったので、介護の資格取得を希望し資格を取る勉強に行った。その最中にひとり暮らしをしたいという要求があり、アパートで共同合宿して働きに行く他県の支援塾に半年未満入所した。その後は、資格を取り、スーツ姿で介護の事業所で「僕は働いているんです」、「ちゃんと給料ももらっています」と言って来た。「病院は通院しているの」と

聞いたら、まったく行っていないということだった。発病して3年ぐらいで、通常10年ほど投薬や通院が必要なはずだが、急速によくなった。

### 支援のポイント

最初の社会的活動の場（ボランティア）の提示

#### 事例11

年齢 27歳

性別 男性

学歴 大学中退。ユニバーサルスタジオ・ジャパンが近くにあるという理由で、たまたま大学に入学。

学力 学力、体力等問題なし。

来所理由 新聞で講演会を知った父親が講演会に連れて来て、その後就労支援事業に参加するため来所。

#### 経過

**当初の様子** 礼儀正しく、ひとり暮らしで自立していた。アルバイトの経験あり（カラオケの受付1ヶ月）。引きこもっていた時期があり病院に行っていた。元気にはなったが、やはり就労のきっかけがなく新規事業に参加した。ここで事業の説明会を当時行っていて、そのときにふらっと1人で来て説明を受けてその場で申込書を提出して帰ったのですぐに指導を始めた。

**家族** 両親、兄ともに医者。本人のみ医学部ではなく工学部（パソコン）。

**支援者の数** 2人が担当（1人はPCのジョブコーチ担当）

**支援者の見立て** ①本人が直接来所し申込書を提出しており自立している、②パソコンを常時使っていて知識がある、③静かなタイプでおとなしいので目標設定が出てこなかった、④コミュニケーションは問題なし

**支援内容** パソコン講座が終了した時点で目標設定ができていなかったため、6ヶ月間インターシップ（最初は無償、最後は有償ボランティア）としてコースの手伝いをさせる。常勤スタッフに相談役をお願いした。朝も遅刻しなくなり、時間にはきちっとして、電話を受けるなどの雑務をしてもらう。

**顛末** 「そろそろどうする」と聞いたら、「ジョブカフェに行きます」と言ってコンスタントに通って、就労訓練事業（受け皿の会社に派遣でウェブデザインをする）を探して卒業した。現在のスタッフの1人がジョブカフェのアテンダントだったので連携できた。

### 支援のポイント

①ひとつ上の現場体験を提示、②「ちゃんと考えていないと時間はすぐに過ぎていくよ」などと自分の判断を促す、③知っているジョブカフェの人を紹介

## 事例12

年齢 21歳

性別 男性

学歴 大学休学中

学力 高校・大学で飛び級、ものすごく頭がいい。パソコン関係の資格あり。

来所理由：就労支援事業。家族が社会的引きこもりの講演会や個別カウンセリングに参加。

### 経過

**当初の様子** 本人も家族も知らないだけでアスペルガーの行動が特徴的であった。体力は普通で、生活習慣も少し変わっているが普通、よくしゃべる人でマニアックな感じがした。普通に見えても一般的にはコミュニケーションは難しかった。

母親が連れてきた。本人は「だまされたつもりで来たよ」と言ってやって来た。説明だけ聞いて帰るという感じだったがその日半日帰らなかった。ほかの研修生と一緒にゲームで遊んでいて「やらないの」と聞いたら参加してくれた。みんなの指導ができるぐらいだったので、スタッフは何も教えることはなかった。

**家族** 家族が理解して対応すれば、自己肯定感や愛着形成など、一番必要だったものができ外に向かうことが可能。自立塾などで家族との関係を切るのはマイナス。

**支援者の数** 実質1人が担当

**支援者の見立て** ①高機能性自閉症のアスペルガーで通常のコミュニケーションは困難、②家族との関係の維持が重要

**支援内容** 高齢者のパソコン指導をし、こんな簡単なことを聞かれて教えてこんなに喜ばれるとは思わなかったようだ。

飛び級のため、自分の能力と人間関係をつくっていく能力がミスマッチだったと感じていた。そのため、いつもゲームをやっておしゃべりをしコミュニケーションを図るよう仕向けた。ジョブコーチ事業のいいところは、グループ指導なので不安感がなく、コーチ役がついて行き、受け入れ先はよく知っている人、よく知っているところにする。そこで親切にしてもらえる、優しく接してもらうことが大事である。

**顛末** 会に愛着を持ってよく遊びに来た。就職するよとって連絡が来てIT関連に就職した。2カ月来所し4カ月後に就職した。まったく仕事はしたことがなかったはずである。学校に行く気はないが、行かないと自分の所属がなくなると言っていた。就職で退学した可能性は高い。

### 支援のポイント

①グループ指導によりゲームやおしゃべりでコミュニケーションを図るよう仕向ける、②適した受け入れ先を斡旋

## 事例13

年齢 28歳

性別 男性

学歴 短大卒業

学力 学力、コミュニケーション能力は良い

来所理由 両親が最初に来所。そのときは「だめな子なんです」とはっきり否定的なことを言った。本人に関して1時間ぐらい話していったが、その後来所せず。姉がコンタクトをとる。

#### 経過

**当初の様子** 簡単なアルバイトはしていた。一つのことに集中すると気分が悪くなると言って最初の頃はすぐ帰っていた。集団の中にいると気分が悪いと言っていた。自分はだめだというレッテルを持ち、コンプレックスが強かった。

**家族** 姉とは仲が良い。姉は東京在住。姉が本人を両親に対して「ちゃんとできるから」と言っただけでかばっていた。姉はエネルギー。両親は子どもと関わることを敬遠。就職した後、両親は感謝して来所。

**支援者の数** 実質1人が担当

**支援者の見立て** 両親が子どもに否定的

**支援内容** 元気になって、メール便の配達に従事。定期的に曜日を決めてずっといるようになった。

「やれるかな」というところで、体力づくりとか気力づくりでメール便に参加して、半年後に働きたいと言い始めた。「目標設定をどこにするの、決まらないと求人票をもらってきてもね」と言ったら、ジョブカフェに自分で行くようになった。

**顛末** 介護関係2ヶ所を選んで就職活動をした。自己アピール書の作成のため1ヶ月ほど悩んでいた。病気入院して介護してもらってうれしかった経験について語った内容を職員が聞きだしその内容を書いてだしたところ面接に通った。

#### 支援のポイント

- ①目標設定をさせた。
- ②本人が望む仕事のために具体的なアドバイスや援助を行った。

#### 事例14

年齢 30歳

性別 女性

学歴 専門学校卒

#### 経過

**当初の様子** 対人恐怖症、目を合わせて話すことができない、外に出ることができない状態、入院歴あり、コミュニケーション能力はとても低い、フルタイム可能、肩こりがひどい。働かなければならないという思いが強い、親にも迷惑をかけているという思いがある。アルバイト経験1回あり。

**家族** 親は子どもの状態をあまり把握していない。アルバイトでも、娘は結婚すればよいという考え。本人は反発し、母親との関係が悪い。しかし、お金の負担は申し訳ないと思っている。働ければ、恩返しできるという考えがある。

**支援者の数** 主に1人

**支援内容** まずは、短期のアルバイトを1日から始め徐々に増やしていった。ネットでのアルバイトの情報検索方を教える。来所後1年経過して、当支援者と2人で職探しを行う（インターネット等）。具体的には、ジョブトレーニングプログラムで商店街の手伝いをスタッフと続ける。来所後1年経過してから、自分から話しをするようになった。同じ実習先を続けた。本人の趣味を、他の利用者に教える会を実施。好きなことを生かす仕事を2人で探す。話し合いを通して、心の中にたまっていた悩みを初めて出すことができた。

**顛末** 現在、工場の計算業務のアルバイトを週5日。長期に移行する話しがでている。

#### 事例15

**性別** 男性

**年齢** 37歳

**学歴** 大学中退

**来所理由** 親の説得で来所

#### 経過

**当初の様子** なにごとにも自信喪失。積極的に就職は希望するが、きっかけがつかめなかった。職業体験は塾講師がある。積極的に就職を希望していた。就職活動はしたが落とされ、無気力になった。

**家族** 母親のとの関係は悪かった、父親は本人の話しのなかに出なかった。

**支援者の数** 主に1名

**支援内容** 2005年10月から7ヶ月間。ジョブトレーニングプログラムを重ねる内に年齢的にリーダー的役割に。子どもが好きということだったので、本支援者の知っている養護施設をまず見てもらおうと、見学にいくなどした。

**顛末** 学童保育施設で非常勤の職に就いている

#### 事例16

**年齢** 32歳

**性別** 女性

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 完璧主義。仕事をやりすぎてしまう。もうこの年ではと年齢を気にする。感情の波が激しい。他所で相談をしていたカウンセラーに不信感をもっていた。過去の職業経験では漫画のアシスタントをしていた。就業意欲は高い。精神的な安定を保って就職活動をすれば、すぐ決まるだろうとみられた。幼少の頃から「いい子でいなくちゃ」というプレッシャーを感じて育ったという。児童養護施設の子どものまま大人になったような心理的状态に感じられた。

**支援者の数** 主に1名

**支援内容** まず、話を聴く。作業をして、体を動かしてもらうことを中心にした。ここでの支援は

精神的安定を目的としたものである。愛されなかった不安をもつ場合は時間がかかるので、じっくり取り組んでいる。漫画、印刷関係でアルバイト程度の仕事は問題ないが、長期に安定してその世界の仕事をつづけていくのは難しい。

**顛末** 継続中

#### 事例17

**年齢** 31歳

**性別** 女性

**学歴** 高校中退

**来所理由** 就職の希望や就職できていな焦りはかなりあり、自分1人での解決の難しさを感じ、変化を期待して来所。

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 異性に対しての対人緊張が強い。就業意欲はあるが、実際には動けない。

**支援者の数** 1人

**支援内容** 支援期間は1年。10年前にまとまったアルバイトを体験した。その後はちょっと短期間アルバイトをした後、家にいる。就業意欲はあるが、就職活動はしていない。ジョブトレーニングを週1,2回午後のみ実施している。求職活動は来所3ヶ月後から開始した。

**顛末** 求人情報誌から本人が応募し、食堂でアルバイト中

#### 支援のポイント

団体に通うことによって、他者に対して関心を持ち、同時に自分の身の回りについても注意を払うようになった。また、他の仲間との共同作業を通じて、対人緊張が緩和してきた。

#### 事例18

**年齢** 25歳

**性別** 男性

**学歴** 高卒

**学力** 高卒程度

**来所理由** 家で何もしていない状況であったところ、親にすすめられて来所。

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 社会適応のためのスキルはあるが、対人関係は狭く孤立している印象。双子の兄弟がいる。来所時は、就労意欲は強くなく、実感がもてない様子。他人と仲良くしたいという気持ちが強い。職業体験はアルバイトのみがある。

**支援者の数** スタッフ全員が平等に接した。

**支援内容** 11ヶ月支援した。ジョブトレーニング、ホームヘルパー研修を受けてもらう。スタッフ

との関わりや研修での対人関係を体験してもらい、できそうな仕事を探した。ホームヘルパーは資格職業であることも情報提供した。

**顛末** 特養施設で勤務している。

#### 支援のポイント

来所3ヶ月後からホームヘルパーの研修をして資格をとったことが自信につながった。

#### 事例19

年齢 28歳

性別 男性

学歴 大卒

学力 学力は高くきっちりしている。しかし、注意力には疑問を感じる。

来所理由 一度就職したが離職後、3年間なにもせずにいたところ、親が心配して研修を受けるようにすすめた。

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 注意欠損傾向がある。仕事上のミスを指摘されると、対人関係がまぶくなるといった側面がある。職業体験あるが、半年でリタイヤし、その後、3年のブランクがある。就労に向けたプランがない状況で親に勧められジョブトレーニングに参加。就業意欲はある。

**支援内容** 注意力の育成と自分のミスに対する指摘を受け入れることを課題として、ミスが発覚しやすい現場で経験を積んでもらうこととした（7ヶ月）。その後アルバイトの面接を始めていった。現在は、このまま継続できるかどうかを課題として実践中。

**顛末** アルバイト採用（倉庫内整理）で働いているが、今後の経過をみている。

#### 事例20

年齢 29歳

性別 男性

学歴 高卒後、専門学校中退

学力 知的能力は問題ない。

来所理由 テレビを通じて施設を知った父の勧めで来所。

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 第一印象では、社会適応のための資質に関しては、まったく問題を感じなかった。しかし、元気がなかった。就職への明確な意志はなかった。

**支援者の数** スタッフ全員

**家族** 親子関係にはトラブルがあるが、母親とは話せる。

**支援内容** 専門学校時の人間関係から通院。次第にこのままではまずいと思い始め、資格を取りに行ったりしていた。就職への明確な意志は無かった。対人関係に不安が強いという印象があり、い

ろんな人と話ができることが変化につながるだろうと考えた。ジョブトレーニングでビルの清掃に従事するほか、ホームヘルパー研修及び企業研修を受けてもらう。

**顛末** 現在、週5日のフルタイムでアルバイト

#### 支援のポイント

ジョブトレーニングのビルの清掃でリーダーとしての役割を果たしてもらったこと。研修を通じて現場の経験を積んだことで、就労を目指す新たなきっかけを与えることができたこと。

#### 事例21

年齢 28歳

性別 男性

学歴 大学卒

学力 知的能力は問題ない。

来所理由 母親に促されて母と2人で来所。

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 人当たりがいい、作業もそつなくこなす。それなりの一般企業で正社員の営業職で働いた職業経験があるが、オーバーワークで身体をこわし家にいるようになったとのこと。母親と本人の2人で来所。人柄の良さは育ちの良さから。就労意欲・自立がどこまで本人の意志か不明。

**家族** 父親との関係は悪い。父親はエリート。母とは親子関係が密着している印象があった。

**支援内容** ジョブトレーニングの実施のあと、関連の職場を紹介したところ就職。

**顛末** 支援のなかで就業体験した関連の職場で営業職に就いている。

#### 支援のポイント

ジョブトレーニングや、関連施設での就労を通じて、自分の体力や作業能力の確認がとれたこと。親の視点以外の評価軸があることをジョブトレーニングを通じて理解させたこと。

#### 事例22

年齢 男性

性別 27歳

学歴 高卒

学力 学歴相当でとくに知的能力に問題なし。

来所理由 対人関係にもう少し自信を付けたいという理由で来所。

#### 経過

**当初の様子と支援者の見立て** 自分の意志で他人からお金を借りて来所。高校卒業後、フリーターをして生活。父親の定年退職が近いことに気づき、このままでは正社員になれる気がしないという思いがあったのではないかと。まじめな性格。

**家族** 親とは同居しながらも関わりは薄い。

**支援内容** 支援期間2005年4月から2006年5月まで。ジョブトレーニング、ボランティアを通じて、多くの人と話す機会を持ってもらった。その結果、就職についての考えが、現実には即していなかった（頭でっかちであった）し、自分の特徴や自分らしさを理解していなかったのが体験を通じて、自分自身を理解し、自分の今後の方向を見いだすことへとつながった。

**顛末** 人と関わらないような方面での就職活動をして、就職（倉庫番）したが、その後、離職。

#### 支援のポイント

ボランティアや接客の仕事の体験を通じて、自分は人と話すことは苦手であるといった結論（自己理解）を引き出した。

#### 事例23

**年齢** 29歳

**性別** 男性

**学歴** 大卒

**学力** 問題なし

**来所理由** 家で何もしておらず、離職を機に親との関係が悪化。親は若者の就職状況に対して理解しておらず、また世間体も気にしている。そうした状況から逃れたいという思いからセミナーに参加。

#### 経過

**当初の様子** 大学卒業後2年間就職していたが、会社の待遇を不満に自己都合で離職。軽度の対人恐怖症。就労意欲はあるが曖昧。

**家族** 父は厳格、母は過保護。就職に関し親の期待過剰で関係悪化

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 軽度の対人恐怖症で、我が強くプライドは高いが、自己評価が低い。体力は問題なし。就労意欲はあるが曖昧。

**支援内容** 就職セミナー参加者を対象にして、月に2回のフリースペースを設置しているが、その利用を促した。フリースペースはその名のとおりで、自由に交流ができる場である。そのほか週に1度の電話で連絡し、さらに就労体験をしてもらった。自信をつけながら求人を探すことを促し、企業説明会があることがわかったので、参加させた。

**顛末** 集団企業説明会で1社に採用された。その後は、心理的な支えになるように連絡をし、本人を啓発しているが、現在、半年の勤務が続いている。

#### 支援のポイント

就労体験先で、若者の気持ちがわかり、面倒見の良い上司に巡り会えたこと。

#### 事例24

**年齢** 25歳

性別 女性

学歴 看護専門学校中退

学力 専門学校の勉強にはついて行けなかった。

来所理由 今の状況を何とかしようと、家族の後押しもあり、自分から広告を見てセミナーに参加。

### 経過

**当初の様子** 暗い。外に出るのを怖がる傾向がある。学校中退後、6年間、自宅で家事等の手伝いをしていた。

**家族** 両親は厳しい。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 印象が暗く、支援にはちょっと時間がかかるかなという印象。

**支援内容** 年齢が高くなってきて、このまもうちにはおけないと就職を考えるようになった。個別計画表を作り、それに基づく行動を求めた。定期連絡や面談でその計画の進行状況を確認した。時期をみて就労体験をさせた。

**顛末** 就労体験先で、体験生からアルバイトとして雇用された。現在はパート採用。

### 支援のポイント

就労体験先の上司に恵まれ、遅いながらも仕事をこなしていくことができ、達成感を得るようになったこと。

### 事例25

年齢 26歳

性別 男性

学歴 大卒

学力 非常に高い

来所理由 親が連絡

### 経過

**当初の様子** 大学卒業後2年間働くが、外交ノルマに耐えられず退職し、2年間引きこもる。神経質。体力的にはちょっと非力。コミュニケーション能力は高い。

**家族** 親は過干渉

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 頑固でプライドは高い。就労体験をするのが良いだろうが、2年間のブランクがあるのでゆっくりと支援していくのが望ましい。

**支援内容** 支援を求めてきた後、セミナーとしてではなく、すぐに就労体験の機会を提供した。初回の体験後は尻込みして、怖がったが、現場の上司との話し合いやきめ細やかな対応もあり、次第に働くコツを理解していった。フリースペースにも参加させた。

**顛末** 就労体験先でアルバイト採用になった。

**支援のポイント** 就労体験先の上司が丁寧に対応してくれた。

#### 事例26

**年齢** 25歳

**性別** 女性

**学歴** 高卒

**学力** 高校入学程度、漢字が書けない、ミスが多い。

**来所理由** 自分で情報を調べてセミナーに参加。

#### 経過

**当初の様子** 高校卒業後、1年半就労したが、ミスを繰り返し退社。以後4年ほど引きこもる。就労への意欲は口にする。対人関係に自身がない。緊張して体がかたくなってしまう。言葉の抑揚が単調。体力はあった。

**家族** 子どもが働けないことについて疑問を感じてはいない。早く働いて欲しいという感じ。それが本人にはプレッシャーになっていた。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 内向的だが、学力的に問題はなくごく普通。早く就労可能であろうとの予測。

**支援内容** 自分の事務所で就労体験をさせつつ、個人計画表の目標達成に向けた、個別的な支援を行った。一日の業務内容について日記を書いてもらいそれにコメントを付け返す。ミスについてはどこが悪かったのかを確認させ、指示についてはメモをとるよう指示するといった基本的なことを繰り返させた。何で間違えたのか自分で考え振り返ることをやってもらった。セミナー参加。

**顛末** 自分で安定所の求人票を取ってきて、スーパーのレジ打ちを受け、2つめで採用。現在その職場で働いている。

#### 支援のポイント

働きたいという意欲を持ち続けたこと。また、それまでできなかった電話対応が、まわりに誰もいなくなったときにできたという体験を契機に行動が変わっていった。

#### 事例27

**年齢** 29歳

**性別** 男性

**学歴** 大卒

**学力** 問題なし。ただし、動作は緩慢。

**来所理由** セミナー参加によって、職業紹介の機会が得られると勘違い。

#### 経過

**当初の様子** 7年間製造業で就労していた。上司が適正な評価をしてくれないとのことで離職。離

職後1ヶ月でセミナー参加。就労意欲は高く、セミナー参加中も合同説明会に参加していた。本人は、専門技術を生かせる仕事を求めたが、求人側は経験者を求めており、就労につながっていない状況だった。

**家族** 求職状況を家族内で相談するなど本人の就職に対しては肯定的関わりがあった。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 間を空けない方がよいのですぐにでも現場体験をしなければならない。

**支援内容** 企業に、利用者の状況を説明して受け入れをお願いをした。体験先の企業の上司に面倒見のいい人がおり、基本的な単調作業ながら、きっちりとこなしていった。

**顛末** トライアル雇用を経て、正式採用に至った。週に2度ほどの状況報告。また会社側ともトライアル期間中連絡を取り合った。

**支援のポイント** 早く現場で身体を動かしたこと。

#### 事例28

**年齢** 33歳

**性別** 男性

**学歴** 高専卒後に、大学卒

**学力** 偏りのある字を書く、計算が合わず、その確認に時間がかかる。

**来所理由** 姉のすすめでセミナー参加。

#### 経過

**当初の様子** 見た目にもどうしても心配な要素が多くある。メンタルヘルスに問題があり通院している。人の中にいると圧迫されそうで恐いとのこと。

**家族** 早く就職して安心させてほしいとの希望を両親は持っている。病気は昔のことといったように、子どもの状況を把握していない。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** メンタルヘルスに問題がありながら本人に就労の意志があるので、どういうことができるか模索した。今の状況で1人で仕事をしていくのは困難だろう。

**支援内容** 自分の事務所で就労体験。その後、市の福祉センターでボランティア活動。活動は日記の代わりにメールでその日の出来事を送ってもらう。セミナー参加。

**顛末** 継続中。国の障害者職業センターに依頼することを検討。

#### 支援のポイント

働けないという状況に際して、きちんと自分の現状を認識する必要がある。

#### 事例29

**年齢** 36歳

**性別** 男性

学歴 大卒

学力 問題なし

来所理由 親の世話になりたくないため就職を希望しセミナーに参加。

#### 経過

**当初の様子** 4年間就労し、人間関係の悪化で退社。その後5年間引きこもり、そのため体力がなくなり生活習慣も乱れていた。

**家族** 親は子どもを信頼し支援していた。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 生活を整え、自信をもたせていくことが必要。

**支援内容** 個人計画を作成させ、その表に沿った目標達成のための個別支援を行った。時期をみて就労体験を組み入れ、就労体験先と本人との間に入って調整。就労体験中セミナー参加。

**顛末** 就労体験先でアルバイトへ移行し、正社員に。

**支援のポイント** 就労体験で自信をつけていったこと。

#### 事例30

年齢 24歳

性別 女性

学歴 大学卒

学力 高卒以上

来所理由 就職したいが自信がない。なんとかしてもらいたい。

#### 経過

**当初の様子** 学生時代にアルバイトで働いていた外食産業の中間管理的な仕事を任され自信を失っていた。

**家族** 特に影響はない。

**支援者の数** 2人

**支援者の見立て** 自信を失っているが前に進みたい気持ちは十分あった。

**支援内容** インサイト2000と長期キャリアプランを実施。事務系ではなく接客系に自分が向いていることを自覚し、ウエディングプランナーとの面接後、ウエディングコーディネーターの仕事に決定。

**顛末** 4ヵ月後に就職（2005年1月～5月）

#### 支援のポイント

本人がその気になるまで攻めながら（相談に乗りながら）待ったこと。

備考：インサイト2000：コンピューターによる職業適性診断システム。長期キャリアプラン：10年、20年先の長期にわたる将来を見通したキャリアプランを意識し整理すること。

### 事例31

年齢 23歳

性別 男性

学歴 高校中退

学力 高校1年程度

来所理由 22歳までは散々遊んだが、きちんと仕事をして普通に仕事をするのがカッコイイと分かったので、就職して正社員になりたい。

#### 経過

**当初の様子** 文字通りの不良ファッション。挨拶はできるが、言葉が適切でない。

アルバイトはかなり経験している。

**家族** 父親と息子2人の3人家族で、本人は父親との交流はないが父親を尊敬している。

**支援者の数** 2人

**支援者の見立て** 問題は学歴

**支援内容** 2004年9月～2005年7月支援を行った。「人を採るなら、遊べる人間、友達が多い人間」との方針を掲げる社長の服飾関係の会社を紹介し、面接後即採用になった。サボりたい自分との闘いにカウンセラーが常に対応。社長も「頑張るなら面倒を見る」とサポートした。

**顛末** 就職後1年以内に退職。理由は今一番やりたい日曜野球を続けたいため。日曜日が休みの居酒屋に転職。将来の夢は自分の店を持つこと。

#### 支援のポイント

本気で話を聞き、カウンセリングを継続していくことで、大人ときちんと話ができるようになり、自分の将来について自信を持って考えられるようになっていったこと。適切な時期に、適切な就職先を紹介したこと。

### 事例32

年齢 27歳

性別 女性

学歴 大学4年生

学力 高校卒業以上

来所理由 就職活動がうまくいかない流通やメーカーの営業職を受けるがすべて落ちた。ネックは年齢。人と接触する仕事につきたい。

#### 経過

**当初の様子** 自分は資格をもっていないので自信がない様子。年齢の問題も影響している。

**家族** 両親と兄1人が対応した。

**支援者の数** 2人

**支援者の見立て** 人物は問題ないが、28歳で就職歴なしの状態から、自己分析の必要があると判断。

**支援内容** 2004年10月～2005年8月の支援。仕切りなおしのために自己分析を実施するも、応募できそうな企業に興味がない。応募したい企業は募集していないなどの現実に直面。考え直すことを勧めて数社受けるが失敗。9ヶ月のブランクの後に、支援者から連絡をして再度自己分析を実施。接客が好き→人が好き→人の世話ができるを確認。福祉分野へ挑戦することになった。県内に進出してくる企業へ応募し、人間性を評価され、乞われて就職。

**顛末** 地域の責任者として活躍。

#### 支援のポイント

対象者はただだと時間を過ごすというだらしな部分があった。そのために、支援者は見捨てずに根気よくカウンセリングを行った。連絡を支援者からとって全員でサポートした。

#### 事例33

**年齢** 24歳

**性別** 男性

**学歴** 高卒。18歳から24歳までニート状態

**学力** 高校卒業程度

**来所理由** このままではいけないと急に気付いた。本人が自発的に面接を希望した。

#### 経過

**当初の様子** 2005年4月までの6年間のニートの状態から脱して、就労への一生懸命さ、真剣さが伝わった。

**家族** 親はよく対応していた。

**支援者の数** 2人

**支援者の見立て** 対人コミュニケーションに問題があるが、きちんと悩んできた様子が窺えた。仕事をしたいという熱意は本気。インサイト2000の結果、性格的には「負けず嫌い」に本人も驚く。

**支援内容** ①産業技術専門学校を紹介、②受験して合格、③金属加工を勉強、④卒業後自ら探した製造業で金属加工の仕事に就職が決まった。

**顛末** 就職（2005年3月～2006年3月）

#### 支援のポイント

何より自分で気付いてニートを脱出できたことが重要だが、気付くまでの過程で、親が「仕事をしな」とプレッシャーにならない程度に言っていたこと、弟の就職・アルバイトなどを通していろいろな人と出会ったことが重要だった（本人談）。

支援者として、まず本人の対人コミュニケーションの問題を考え、溶接の資格をとることを勧めたことが本人の自信につながった。

#### 事例34

**年齢** 27歳

性別 男性

学歴 短大卒業後に大学に編入。後に中退

学力 高卒以上

来所理由 正社員として就職希望

#### 経過

**当初の様子** 今までに運送・製造・請負などの仕事をした。今は自立したい。就職活動では、安定所の紹介で求人広告による直接の応募で70～80社に正社員としてトライしたが、書類選考の段階で年齢的な理由で採用されなかった。ホワイトカラー以外を希望。

**家族** 家庭では本人任せ。家庭の影響力はない。本人独自の問題。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** アトピーになり自信がない話し振り。話すときには上目使い。病院に就職活動を試みて失敗したためにさらに自信をなくしていた。

**支援内容** 2005年4月来所。本人の現在の悩みを聞いたところ、自己の「適性問題」であることが判明した。自信がなく、欠点を先に言って防衛した。支援者は彼の言葉に同調し、一緒がっかりし、励ましを与えた。安定所の求人広告を見て応募していたが、自分はできないと思い込んでいた。支援者は自身が開発した職業適性検査活用マニュアルを作成し、最適職種企業選択シートを用いて考えさせた。自問している間しばらく時間があつた。

**顛末** 2ヶ月後、シートを基に職種を限定し、入社試験を受けた。3社は不合格だったが、同年7月に4社目に正社員として採用された。

#### 支援のポイント

①支援者自身が開発した職業適性検査活用マニュアルを用いて、最適職種企業選択シート記入で本人に適切な職種の限定を行ったこと、②支援者が本人と同調しつつも、良さを引き出し、条件との整合性を本音で話しあつたこと、③本人からプロセスを含め評価させ、「次回からは自力で出来る」発言をえたこと、④気力が充実すると、症状も軽快になる。就職後も自分を守るために、体調管理と就業時間と就業の質の管理を重視するようにアドバイスしたこと

#### 事例35

年齢 23歳

性別 男性

学歴 文系大学卒業

学力 大卒以上

来所理由 就職を希望（自分にあつた仕事をしたい）

#### 経過

**当初の様子** アルバイトは学生時代にコンビニで働いた。自分にあつた仕事をしたい。学生時代に3社受験したが不合格だった。その後1年間は受験していない。

無業（引きこもり）

**家族** 就職は本人任せ

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** ①対人コミュニケーションについては自己主張能力が低い。②このままでは就職できないので何とかしたいと切羽詰った状態

**支援内容** 2005年4月5日に来所。本人が自ら語るほうではないので、話題を拡げ、雑談を多くした。適性診断（インサイト）を使い、外から自分を見つめ直す作業の手助けをした。インサイトは有効に機能した。情報系に向いていることを自覚させた。しかし、職務経験がないためにその能力をどう評価していくかが問題だった。正社員一本槍だったが、トライアル採用までこぎつけた。この場合は安定所の利用が鍵であった。支援者は情報関係の資格をとることを勧めた。資格取得後に就職。

**顛末** 2005年8月に就職。

#### 事例36

**年齢** 35歳

**性別** 男性

**学歴** 高卒

**学力** 高卒相当

**来所理由** 就職を希望

#### 経過

**当初の様子** 「対人ゲーム」にはまり10年間引きこもり。昼夜逆転はない。高卒直後、4年間建材業に就職。その後10年間無業。昨年3月までは今のままで何となく過ごしてきたが、4月～9月まで公共訓練施設で金属加工の職業訓練を受けた。10月から就職活動を始め、3社に受験して、全て不合格だった。理由は10年間のブランクで、ポリテク技能を評価されなかったため、自信をなくした。

**家族** 本人任せ

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** このままでは就職は不可能であると判断した。理由は企業の偏見。10年間のブランクに企業は拘った。

**支援内容** 再度適性診断をした。研修内容の提示と中断の中身の説明をした。「外に出て自己をさらす」経験の必要を感じて、3月に「自己PR会」に参加させた。安定所との連携・協力をえてトライアル雇用として20社の企業を受けて、2社に合格した。正社員を希望したので、支援者が開発した適性検査を受け、15社をリストアップして受験した。6社目に合格し、8月17日に入社した。

**顛末** 2006年8月17日に就職（支援開始は2006年2月）

#### 支援のポイント

「対人ゲーム」の内容を聞いてあげたこと。支援者が本人に「共感し・驚き・ほめた」こと。（就

職までにカウンセリング4ヶ月間、安定所の求人検索に2ヶ月間を過ごして約半年の間ジョブカフェにいたことになる。)

#### 事例37

年齢 22歳

性別 男性

学歴 米国大学卒。

学力 問題なし

来所理由 英語を活かした職業につきたい。弟がジョブカフェを利用したことがある。

#### 経過

**当初の様子** コミュニケーション能力あり。アルバイト経験なし。英語を生かしたい。就職活動をしてはいるが、現在は宅配便ドライバー。家族関係では高卒で既婚の弟がジョブカフェに来所して就職難を実感している。

**家族** 協力的

**支援者の数** 3人（主支援者は土曜日のみ勤務のため、他の曜日は他のカウンセラーが担当）

**支援の見立て** 英語を活かす仕事につきたいものの何が自分にあっているか具体的には考えていなかった。コミュニケーション能力は十分にあった。

**支援内容** 2005年9月24日～2006年6月まで支援。自分から来所して支援が開始された。支援としては英語を生かす仕事をメインにした。すぐに現金収入を望むため。とりあえず、アルバイトとして販売業に短期間従事。翻訳の仕事はあったが拒否した。自分から安定所を通じて企業の人と出会った。支援の結果アルバイトをしながら活動し個人の英語塾に決定した。そこで人脈を拓げステップアップすることに本人が納得した。

**顛末** 個人の英語塾に就職。

#### 支援のポイント

望ましい支援者の条件は傾聴である。求人情報の把握が必要である。

#### 事例38

年齢 33歳

性別 男性

学歴 大卒

学力 大学卒業以上

来所理由 中間管理職の現役だが、転職を希望

#### 経過

**当初の様子** 既婚で子供はいない。学歴は十分あり、繊細なイメージを感じさせた。現在は営業を担当しているが、企業の将来が不安で、とくに福利厚生に不満感がある。

**家族** 家族は理解を示した。妻も一緒に支援を受けるために登録して雑貨店の夢をかなえたい考え。

**支援者の数** 2人。1人はカウンセラーで他の1人は職業訓練の相談・情報提供担当。

**支援者の見立て** 支援のメインは転職で、現状を改革して中堅管理職として活躍したい対象者だがキャリアは十分あり、もったいない。県内で受け入れ先は少ないと予想。リセットさせたい。

**支援の内容** 支援者であるカウンセラーに興味を持ち、パソコンで情報収集と役割を検討した。支援の結果、転職せずに今の会社でスキルアップをすることに決定し、産業カウンセラー資格講座を受講することになった。支援の成果は大きなステップアップの方針を自覚させてスキルアップの方法を提示したことで、それが功を奏した。

**顛末** 2005年5月～2006年1月までの面接で、現職に留まりスキルアップすることになった。

#### 支援のポイント

支援者の経験が重要だった。カウンセラーの印象でスキルアップを図ることにつながった。望ましい支援者の条件は傾聴である。このケースの場合、県内では受け入れられる会社は少ない。本人は転職へ一歩押してくれることを望んでいたのだろう。

#### 事例39

**年齢** 25歳

**性別** 女性

**学歴** 短大卒

**学力** 高卒以上で、栄養士の資格あり

**来所理由** 短大卒業後半年間アルバイト（食品の品質管）をしてから就職した。転職の相談。

#### 経過

**当初の様子** 過去にアルバイトの経験あり。しっかり者でキャリアアップを望んでいた

**家族** 家族からの影響は不明

**支援者の数** 2人（土曜日以外に1人が担当）

**支援の見立て** 栄養士の資格を生かした再就職を切望していた。今の職場では将来の不安がある。責任感ややりがいのある仕事を求めている。

**支援の内容** 2005年11月～2006年7月にカウンセリング9回実施。栄養士の資格を生かした職種を望んでいる対象者の条件に合う職種の検討。

**顛末** 2社を断る。面接指導は何度も受けている。継続中。

#### 支援のポイント

キャリアを生かした書類作成。職業条件のマッチングが課題。

#### 事例40

**年齢** 25歳

**性別** 男性

**学歴** 大学中退。卒業試験を目前にして、教授との人間関係がうまくいなくて、中退。工学部（数理情報）

**学力** 試験をしていないので、正確なことはわからないが、計算力は専攻学部のことを考えるとそれなりの能力を有していたと思われる。読み書きについては、相談の中で会話から推察すると高校生卒業程度と思われる。

**来所理由** 自分から就職支援を求めて来所した。

### 経過

**当初の様子** このままではいけないという危機感を持っており、親からも早く仕事に就くようには言わわっていたようである。

**家族** 大学を中退した直後の今年の初めのうちは、就職のことについては、家族から何もいわれていないようである。その後になって、少しずつ仕事の話が出始めてきて、本人も気になり出したようだ。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 2年間、引きこもり状態であったため、基礎体力、生活習慣、対人コミュニケーション能力ともに欠けていたように見受られた。特に体力面が心配。大学中退の際、人間不信に陥り、「鬱」であると病院で診断されており、薬も服用していた。医師の相談を重視していたように感じられた。本人もどうしていいのかが、分からない状態にあった。すぐに仕事に結びつけることの困難さを感じたが、本人が非常に素直で、どんな仕事でもいいから早く結果をだしたいという気持ちが強くあったので、アドバイスによつては、即、仕事に結びつく可能性があるのではと思った。

**支援内容** 平成18年8月初旬から1ヶ月。アルバイトなどを含めて職業の経験はない。求職活動はまったく行っていない状況であった。まず、本人が今、どういう状況にあるかの聞き取りを行い、相談を受けにきた内容について具体的に尋ねる。まずは家に引きこもらないで外の空気を吸うこと、仕事に従事するためには体力作りが必要であること、それと並行して各種セミナーへ積極的に参加をするようアドバイスを行なった。1週間たって、本人から、相談に来た翌日から1日3キロ～6キロ毎日走っていて、「今までとは違う自分があり、気持ちがいいです。体力もついてきたので、仕事探しを始めたいと思います」とのことだったので、同じフロアの安定所の窓口へと誘導。求職活動に入る。しばらくは静観していたが、3社位、面接を受け、なかなか採用にならないことに悩み、再度、相談を受けたが、2年間のブランクがあるわけだから、焦らずに取組むようアドバイスを行う。

**顛末** 面接を受けた企業の面接担当者より、病気を抱えていることを理解された上で、他の関連会社に紹介するとのことだったが、面接を受けた企業の直接の採用となった。

### 支援のポイント

本人の気持ちを良く理解し、真剣に取組み、偏見を持たずに対応すること。相談者に即応したアドバイスをケースバイケースで行う。

#### 事例41

年齢 25歳

性別 男性

学歴 大学院中退。大学院生として約4ヶ月間学業に励んだが、教授や他の院生との人間関係に悩み中退（本人は空気が読めなかったと表現する）。理学部（応用物理）。

学力 計算は専攻学部のことを考えると能力はあるものと思われる。読み書きについても大学レベルだと感じる（本人にも確認）。

来所理由 母親にすすめられ一緒に来談。

#### 経過

**当初の様子** 働きたいという意思是伝わってくるが、希薄さを感じた。塾講師（学生時代）の経験がある。就職のための活動は3年間、まったく行っていない。母親と一緒に来談したが（このことも問題か）、本人から働きたいという意思是伝わってくるが、本当に仕事する気があるのかという印象も受けた。

**家族** 家族は仕事に就いてもらいたいという気持ちを常に持っていた。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 3年間、引きこもりに近い状態であったため、基礎体力、生活習慣、対人コミュニケーション能力ともに、やや欠けているように見受けられる。特に、対人コミュニケーション能力が気になった。本当に仕事する気があるのかという印象も受けた。

**支援内容** 平成18年9月初旬から現在に至る。はじめに、本人が今、どういう状況にあるのかの聞き取りを行い、相談を受けに来た内容について具体的に尋ねる。3年間、仕事に就かず、引きこもりに近い状態であり、親もそろそろ就職のことを考えたらというので、共々に仕事探しに来たとのこと。仕事としては塾講師をしたいということであったが、「自己理解」、「仕事理解」に乏しい面が伺えたので、仕事探しをする前に、自分自身を知ることの大事さを伝え、9月は体力作りをすること、「ジョブカフェ」が実施している「プチセミナー」、「就職セミナー」に参加すること、県が実施する5日間の「就職基礎能力速成講座」の受講をするようアドバイス。母親も同席して現状での就職の困難さを伝え、確認を取り、了承を得る。求人探索をしてもらうため、同じフロアの安定所の窓口へ誘導した。「学習塾」の求人情報を引き出ししているようであったが、求職活動には繋がっていない。

**顛末** 相談を継続中。現在は、体力作りは実行していないようであるが、各種セミナーへは参加している。「就職基礎能力速成講座」の受講の結果を受けて、進捗状況を見ながらアドバイスを継続して行こうと考えている。

#### 事例42

年齢 27歳

性別 男性

**学歴** 大学院（工学部）修了。大学院は留年をして卒業。在学中は熱心に勉学に励む。

**学力** 小さいときから成績がよく、読み書き・計算能力は相当に高かったと本人も述べる。

**来所理由** 卒業後、3つの企業に応募するも決定に至らず、焦りがあり遠距離だが就職したいと相談に訪れた。

### 経過

**当初の様子** 就職したいとの願望は強かったが、うまく面接が受けられずに最近では応募をせず、家の中にいることが多い。希望とする職種は工学部で学んだことを生かせるものであるが、他の職種の製造などででも、就職しなくてはと考えている。小さい頃から周りとのコミュニケーションが不得意で（自分の思い込み）、勉強する以外には自分を表現する手だてがなかったと本人は思っており、周りからも特別視されていたようだ。「遊ぶ相手がいないので勉強しただけ」と吐き捨てるように言ったのが象徴的であった。職業の経験はまったくない。

**家族** 両親が高齢のため、なんとか早期の就職をと希望している。比較的、おっとりした家庭である。小さい頃よりおとなしく学業の成績がよいということで、特に問題を感じていなかったようであるが、社会に出ることになり、慌てながらも口も出さず見守っている状態。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** コミュニケーション能力の不足から積極的な応募にいたらないため、自信を失っている。しかし、人に伝える力は、本人が思っているよりは高い。

**支援内容** 平成17年7月に来所。通算6ヶ月支援。職業適性検査を実施。その結果では、自己評価の能力と自己肯定観が極端に低い。大学院で学んだことについても希望を失い、製造職を考えているとのことであったが、面談したところ口数は少ないが、本人が思っているほどに人に伝える力がないようには感じない。自信を取り戻してもらうために、ボランティア活動を提案したところ、両親と相談し参加を決め、週一回の当番参加をこなす。大学院での教授へのアプローチをも合わせて勧めたところ連絡をとったようである。平成18年1月に教授の紹介で就職が決定したとの報告があり、18年4月から就職（情報関係）。

**顛末** 大学院の恩師の斡旋で正規就職

### 支援のポイント

NPOの市民活動団体においての受付の有償ボランティアを週一回、半年ほど参加した。周りとの人間関係も少しずつではあるが改善。担当者から日数を増やすことを打診されたが、就職への意欲が出てきたため断り、就職活動を再開。メンタルヘルスに関する知識も必要であることを実感している。

### 事例43

**年齢** 20歳

**性別** 男性

**学歴** 高校卒業後、情報システムの専門学校卒業

学力 中の下、程度ではと思われる。パソコンの実力は3級程度。操作は遅い。

来所理由 専門学校卒業後、最初の就職先から断られたことで途方にくれ、母親同伴で訪れた。

### 経過

**当初の様子** 生まれつきの難聴であるが、身体障害者手帳はなく障害判定のぎりぎりのところである。そのためか動作や反応が鈍くコミュニケーション能力は低い。専門学校卒業後、家具メーカーに就職し、いろんな作業を経験させてもらったが、作業が鈍いとのことで3ヶ月後に断られた。真面目な性格で仕事をしたいと強く思い、自分にできることであればどんな作業でもやりたいと考えている。離職後は自信をなくし、相談時には自分で応募はしていない。

**家族** 家族は本人の将来を考え早く就職をしてほしいと強く望んでいる。他の兄弟に比べて動作が鈍いことで、絶えず「早くはやく」とせかされており、母親と祖母から口うるさく言われている。自分で考え動作する前に周りの口がでるので、自分で考えることが少なくなってしまう状況と推測される。

**支援者の数** 3人。キャリアカウンセラー、就活サポーター、県の高卒未就職就業体験担当者

**支援内容** 就職の手助けや将来のことを考え、障害者手帳について聞いたところ、母親も以前、病院で相談したが障害認定については、もう一度受けさせたいとのことだった。県の福祉センターを紹介し相談に行ってもらった。結果はボーダーラインで結局は認定にはならないとの報告を受けた。高卒未就職就業体験を受ける要件で、すぐには難しいとのことでコミュニケーション能力をつけるためにも、定期的に来てもらい自己分析からはじめ応募書類の作成の指導を行う。県の許可が出たので就活サポーターの協力で食品製造会社で食鳥の選別作業を体験した。本人は続けて働きたいとの意思表示を会社担当者にするが、作業が極端に遅いこと、工場内での危険性が高いことで断られる。ショックはあったが、気を取り直し求職活動をやろうという自信はできているとみられた。ヤング・ハローワークで求人検索し、鉄工所に応募したところ採用になった。1ヶ月で作業が遅いとのことで断られる。その後は家の人が相談に行くよう勧めてもなかなか動かない状態だったが、支援者からのアプローチで再度支援が始まる。

**顔末** 働く意思があり、真面目であることで、必ず仕事に結びつくと考え、短時間の単純作業（パソコン・データ入力など）を勧め、応募を考えてもらいたいと思い、相談を継続中。

### 支援のポイント

能力や人柄にあった仕事を探していくこと。

### 事例44

年齢 21歳

性別 男性

学歴 工業系の専門学校を卒業。遠距離を高校・専門学校と休むことなく資格取得についても意欲的であった。

学力 高校と同じ系列の専門学校へ進学。整備士の資格など取得しているが、読み書きの能力は低い。

文章にすることは特に不得意。数値能力は普通と思われる。履歴書作成時に漢字は間違いが多い。

**来所理由** 本人が自ら訪れ、相談して欲しいと声をかけてきた。以前、一回来所の経過があったが、その時はカウンセリングは受けていない。思いを決して声をかけてきたようだ。

### 経過

**当初の様子** 職業経験はまったくない。極度の緊張から最初の一言くらいで、あとは口をパクパクするが発声できない（場面緘黙か）。会って筆談より、電話のほうが意思の疎通が可能であった。働く意思はあるが応募にいたらない。安定所の窓口でも伝えることができない。

**家族** 両親共におとなしい性格。本人も小さい頃からおとなしくはあり、無口を特に問題視していなかった。しかし、大きくなるにつれて無口を通り越している状態に親も気づいた。社会にでて必要最小限のコミュニケーションをとるため言葉で伝えてほしいと本人に諭すが、変化がなかったとのこと。今は、父親が亡くなり、生活のため母親が働いている。母親と本人、妹の3人家族。1日で断られてでもいいから応募してみたらと、母親は少しずつでも前に進むよう、冷静に対応、応援している。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 慎重に相談をすすめる必要がある。他の機関の利用も考えられるし、実際に試みたが、今は慎重にしたい。

**支援内容** 地元の安定所に行っていない状態で来所。卒業して月日が浅いため、焦りはあまりない。同フロアにある安定所の窓口での求人検索をすすめたが、応募は一度もしていない。会話での筆談などによりコミュニケーションをとるも、なかなかすすまない。面談の方法に工夫したりするが支援の限界を感じ、他機関での相談も考えるが、慎重にしたいので母親とも連絡をとる。「若者サポートステーション」での、職業体験などが有益ではないかと考え同所に紹介する。今も両所で支援継続中。

**顛末** 相談を継続中

### 支援のポイント

焦らず、コミュニケーションに工夫をしながら奨めること。性格的に暗くはないため、社会で必要な最小限のコミュニケーションがとれれば、動作は鈍くないため仕事につながると期待している。

### 事例45

**年齢** 22歳

**性別** 女性

**学歴** 福祉関係のコースで専門学校卒業

**学力** 高卒相当かそれ以上

**来所理由** 事務職で就職を希望。卒業時に、経験がないし、それは難しいといわれて、応募を迷った。しかし、一度やってみたい。

### 経過

**当初の様子** 過去にアルバイトで販売を経験。事務職は難しいといわれたし、何が自分に向いているのかわからないこともあって、就職を迷っていた。1人で来て、公開求人情報をみたり、安定所のインターネット情報システムで求人検索を1人でやったりしていた。その後、就職したいので求人を紹介してほしいと職業相談窓口に来た。

**家族** 「事務職になりたいのなら、福祉で一度働いてから、それからにしてはどうか」という意見であった。本人は一旦、福祉関係を断念していたが、家族の助言で迷っているとのことであった。

**支援者の数** 実質1人が担当。合計2人で担当したことになるが、初回相談以外は、管理職相当の専門職員が全行程を担当。

**支援者の見立て** ①パソコン検索で情報を集めることが可能、②パソコン操作が一定水準出来たので、何とかなると考えられた。③消極的な面があるので、本人にはチャレンジ精神の重要性を強調した。

**支援内容** 1年以内のケース。支援期間は約20日。パソコン操作の技量をセールスポイントとし、チャレンジ精神を培うように働きかけながら、求人を探す。結果は、営業事務で紹介したところ、就職。

**顛末** 2006年2月に求職申し込みをして約20日後の同月中に就職。

#### 支援のポイント

①本人の心理的な迷いの内容を把握したこと、②把握した本人の興味、能力、適性を求人事情に適合させた形で本人に提示したこと、③②を実行に移すについて、セールスポイントを明確にして、求人者に職業紹介をしたこと、④相談中に本人に自身の問題点及び状況への対処法を明示して働きかけたこと、⑤本人と本人に見合う求人とを出会わせる手段を行使したこと。

#### 事例46

**年齢** 15歳

**性別** 女性

**学歴** 高校中退

**学力** 中学校3年程度がやっとか。

**来所理由** 養護施設を退所しなければならないので、住み込みで就職したい。

#### 経過

**当初の様子** 養護施設の職員が同行して来所。高校を中退すると施設を退所する規則になっている。学力面を中心に能力的には中学生と比較しても高いとはいえないが、知的障害ではない。対人コミュニケーション能力に問題がみられた。会話が少なく、問いかけてもやっと答える程度。本人の希望や考えていることが十分につかめない状態だった。それまで、求職活動はしていなかった。

**家族** 東京（A安定所管内）にいて、別居。複雑な事情があって同居は出来ない。そのため、住み込み出来るところに就職したいと希望して紹介窓口に来た。支援の行程では家族と接触することも出来なかった。

**支援者の数** 実質1人で担当。合計2人で担当したことになるが、初回相談以外は、管理職相当の専門職員が全行程を担当。

**支援者の見立て** 求人の状況から職業紹介に至るまでが、かなり大変。就職希望地域、希望職種の変更等するなどなんらかの対策が必要。

**支援内容** 1年以内のケース。支援は1ヶ月経過で継続中。本人の希望が、①住み込みであること、②飲食店の調理または接客ということ、の2つであり、当初はそれに沿って求人を探すが、実際は応募できる条件の求人はない。そのため、本人にそれを伝えつつ、製造業の求人を探すが、やはり、「住み込み」の条件を受け入れる求人はない。そこで、親のいる東京のA安定所と連絡をとって、求人紹介を依頼した。しかし、現在まで、応募できる求人があったという連絡はない。施設の職員には電話で相談の結果を必要な範囲で報告している。この事例の条件に合致した求人を探しだすことの困難を痛感。

**顛末** 2006年7月求職申し込み。以後3回の相談を実施した。今後も、相談を継続する。

#### 支援のポイント

①本人が施設入所者であり、かつ、高校中退のため、退所を迫られていることから、住み込みの条件を重視して求人を探したこと、②施設や他の安定所と連絡を取りながら、支援をすすめたこと、③本人の対人コミュニケーション能力及び学力の水準から、飲食店の接客という希望条件の見直しを求め、緊急に必要な「住み込み」の条件を満たすことが可能になるように希望職種を変更したこと

#### 事例47

年齢 18歳

性別 女性

学歴 高校定時制在学

学力 高校卒業程度

来所理由 学校では求人がなかったので、就職先を探してほしい。近いところに勤めたい。

#### 経過

**当初の様子** 母親が同行して来所。就職したいが、学校紹介では就職できなかった。卒業したら就職したい。自動車運転免許がない。対人コミュニケーションは良い。体力はない。アルバイトの経験等の職業経験はない。学校を卒業したら、自分の収入で生活するのは当然という考えをもっていた。

**家族** 本人にまかせていた。とくに問題はない。

**支援者の数** 合計2名。新規学卒として扱ったので、当初、ジョブサポーターが相談。職業紹介は窓口担当職員

**支援者の見立て** 対人コミュニケーション能力が高いので就職可能とみられた。

**支援の内容** 1年以内のケース。支援期間は約1ヶ月。本人の希望は、運転免許がないこともあって、自転車通勤できるような近いところで、正社員ということであった。

相談のなかで、本人の適性を把握し、自己理解を高めるとともに、体力や運転免許なし等を勘案

して通勤可能な工業団地求人を探し、製造業で電子部品の組み立て・検査係のパートタイム求人があったので、安定所から求人者に交渉し、正社員での応募の可能性を引き出した。同時に、本人には面接試験でコミュニケーションの良さを意識させた。求人者との面接の結果、協調性と堅実性があるとの評価を得て採用決定。

**顛末** 2月に来所し、数回の相談ののち、3月に就職決定。現在も勤務している。

#### 支援のポイント

①本人の体力、人柄等条件を考慮して地元求人を探したこと、②地元の求人者に求人条件の変更を求めて、正社員応募の可能性を導き出したこと、③本人の長所である対人コミュニケーションの良さを本人に意識させて面接を受けさせたこと、④相談の中で把握した本人の適性等について話して、自己理解を高め、希望職種を求人と適合させたこと

#### 事例48

**年齢** 18歳

**性別** 女性

**学歴** 高校定時制在学中

**学力** 読み書きを中心とする文書処理に関する能力は低い。コミュニケーション能力はよくない。

**来所理由** 親から勧められてきた。定時制に在学しながら、高校と関係のあるそれなりの働く技能を身につけたい。

#### 経過

**当初の様子** 自転車通学をしていた。通学に支障がなく勤務できるところであって、かつ、学校の先輩がいるところに就職したいという。高校の関係から、電気機械関係の職業で就職したいと希望した。挨拶等社会性に若干問題があるようであった。

**家族** 働くことを経験させようと考えていた。

**支援者の数** 実質的には1人。ジョブサポーターが担当。

**支援者の見立て** 言動に未熟さがあり、就職後にも就職先の理解が必要。

**支援の内容** 1年以内のケース。支援期間は約3ヶ月。新規学卒と同様にジョブサポーターが担当することとした。本人の条件である通学と両立する通勤条件と先輩がいるという条件を考慮して、ジョブサポーターが過去に関係していた企業に面接してもらえるどうか当たることとした。

本人の状態からも、すぐには職業紹介せずに、事業所見学を設定。5月に事業所見学をしたところ、詳細の条件が不一致で不調。

しかし、再度、7月に事業所と折衝し、本人を育てていくという目でみてもらいたいと頼む。その結果、正社員で印刷機の組み立て工として採用になる。先輩とも会って、行きたい、来い、ということのようだった。

**顛末** 4月に求人申し込み、5月に事業所見学したが不調。7月に再度、安定所から事業所に交渉し、「育てる」という観点で採用を認められ、就職。

## 支援のポイント

①定時制在学中だが、働くことについて本人と家族が意欲をもっていたことを積極的に受け止めたこと、②協力と理解を求めることができる事業主を支援者が知っていたこと、③即戦力にこだわらず、若年者を働かせながら育てるということについて、求人者の納得を得られるように訴えたこと、④本人に希望職種の見直しをさせたこと

### 事例49

年齢 35歳

性別 女性

学歴 高卒

学力 高卒程度

来所理由 大学受験に失敗して、家に引きこもりがちであったが、簿記2級の資格を取得。1級の資格を目指して勉強しながら、正社員で就職もしたい。しかし、正社員は実務経験がないので無理だろうから、どうすればよいか助言が欲しい。

### 経過

**当初の様子** 大学受験失敗後、親から「何でもよいから仕事をしろ」といわれ、少しやけになっていたこともあったという。引きこもりがちであったが、アルバイト経験（工事現場等の交通誘導）は卒業後に数ヶ月程度ある。その後、数年たってから、資格取得の本を読んで簿記を勉強し、2級を取った。1級取得のための勉強しながら就職もしたいという。高校在学中にもアルバイト（食品加工の仕分け作業、清掃業務）はしたことがある。理屈としては、実務経験がないことが正社員の就職に不利なことは理解している。その意味では現実認識があるが、実感として状況を理解していない。その反面で、年齢的に限界がきているので、今、就職しないといけないという焦りのような思いがある。

**家族** 以前は、親は、「何でもよいから仕事をしろ」といったこともあるが、今では、何もいわないとのこと。本人の無業の期間が長くなっているため、親は失望あるいはあきらめをもって、その状態に慣れてしまったと思われる。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** うつむきがちで、声も小さい。体力等は問題がないが、話し方などに明るさや積極性を感じられない。これまで働かねばならないという気持ちはあったが、大学受験では薬学を目指して失敗し、その後、それ以外の職種にならざるをえないことなどからずるずると来てしまったという意識を持っていると判断した。

年齢（既に35歳）の問題もあるが、それよりも実務経験がないこと、働くことや労働市場について実感してもらうことが必要。ただし、現実認識がないとはいえないので、まず、時間をかけて求人事情にあった職種の選定幅を拡大させ、次に正社員（常用フルタイム）という雇用形態の条件を緩和させることで就職させることが必要と評価した。とにかく助言を求めて自らが来所したことを

大切にし、逆戻りさせないように働きかけることが必要と判断した。

**支援内容** 1年以内のケース。約3ヶ月相談し、その後、技能習得に入り中断中。まず信頼関係を築くため、現在の状況を中心に相談。次に、就職するまでのことで不安や心配な事項を確認、就職に必要なプロセスの説明をした。さらに、次回来所相談までの課題として自己分析、職務の棚卸しをするように求め、それに必要な自己分析表の書き方、職務棚卸し書の作成を指導。来所時には、自己分析表及び職務棚卸し書をもとに履歴書及び職務経歴書の作成方法を指導。履歴書等を添削するほか、応募書類の書き方、とくに志望動機について入念に相談、打ち合わせを行う。地元労働局主催の面接対策セミナーを受講してもらった。セミナーで「声が小さく暗いイメージ」であることを指摘されたとのこと。基礎的な職業技能としてパソコン操作で計算ソフトと文書作成ソフトの使い方を習得するよう指示した。

**顛末** 当初はうつむきがちで暗かったが、数回の面接をすると自分から志望動機の書き方を提案するなど主体性と自発性がみられるようになった。3ヶ月程度相談ののち、民間教育訓練施設で基礎的な職業技能（パソコン操作）を習得のコース（3ヶ月から6ヶ月間）を受講中。修了後に安定所に連絡をするように指示した。

#### 支援のポイント

①良く話を聴いて、本人の弱点を見極めたこと（労働市場の実感的理解がないこと、暗さがあること）、②具体的な求職活動の方法を教示したこと、③具体的に弱点を補う方法を指示したこと（セミナー、職業訓練）、④本人の状況から担当を1人に限定したこと

#### 事例50

**年齢** 26歳

**性別** 男性

**学歴** 大卒ただし2年生のとき2年間引きこもりで留年。中学卒業後にも2年間引きこもりがあったので、大卒時は26歳。

**学力** 大卒程度

**来所理由** 何の仕事に就いたらいいのかわからない。人の役に立つ仕事に就きたいので、紹介してもらいたいと思って安定所に来所。来所したところ、安定所の掲示板にある「フリーターのみなさんへ」の案内書きをみて、自分がそれに当たると受付に申し出た。

#### 経過

**当初の様子** 言葉を選んで話すなどしていた。礼儀正しい。祖父から「人の役に立つ仕事」に就けといわれて、漠然と「人の役に立つ仕事」をしたいと考えていたようである。しかし、大卒時に応募した職種もばらばらで一貫性がないし、今、希望している「人の役に立つ仕事」のイメージを尋ねると、真顔で「ニート対策、介護関係の高齢者対策、食糧事情対策」と答えるなど、具体性や一貫性がない。本人の真の希望は「人に役立つ仕事」なのかどうか疑問があった。

**家族** 祖父に「人の役に立つ仕事」を選んだらと在学中から言われていたという。両親は健在だが、

ほとんど話には出てこない。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 慎重というか臆病さがあるように感じた。週1回程度のアルバイトで、あとは家にいるということで生活習慣には不安があるが、体力に問題はないとみられた。何をどうしてよいのか固まっていない状況だとみえた。就職には自己理解が必要で、そのための時間が必要と見立てた。

**支援内容** 最近1年以内のケース。支援期間は約4ヶ月。まず、本人の状況を話してもらった。次に、次回来所時に履歴書を持ってくると、なぜ人に役立つ仕事、社会問題に関する仕事に就きたいのかを文書にして持参するように指示。来所時には、持参書類をもとに希望職種の応募の可能性や、応募に必要な技能や資格その他の条件を確認するように求めた。また、「人に役立つ」仕事は、直接役立つだけでなく間接的に役立つもののあるのではないかと助言して、選択肢を広げる。さらに、持参書類を基に、自己推薦書を作成させ、自己の長所を再認識させた。また、当該安定所だけでなく学生職業センターでの利用を促し、具体的な利用方法を教示。選考会への参加希望に同意し、コンビニエンス・ストア関係の企業の一次面接に合格したので、二次面接の前には来所してもらい面接を受けるに際しての注意事項について教示した。

**顛末** 4ヶ月くらい相談した。学生職業センターで民間の求人管理選考会のチラシを自分でみつけた。行ってみたいと申し出たので、参加するように進めたところ、内定した。1年間の実務研修の後にコンビニのスーパーバイザー等の社員に採用とのこと。非常に喜んでいて、もしかすると、「人の役に立つ仕事」に就くというよりは、現状を打破し、会社員として社会からみられることを希望していたのではないかと感じた。支援を受けたことによって自分で行動できるようになったと評価できる。実務研修の後に採用になった。

#### 支援のポイント

①漠然とした職業イメージを現実的かつ具体的なものにするように、自己点検等をさせたこと、②本人の申立とは別に本当の希望があることを感じて対応したこと、③面接突破のための注意を具体的にに行ったこと、④自分の長所を再認識させるなど自己理解を援助したこと。

#### 事例51

**年齢** 20歳

**性別** 女性

**学歴** 短大卒

**学力** 短大卒程度

**来所理由** 前年3月に卒業した。事務系で求職活動をしてきたが、うまくいかない。どうすれば、事務職の仕事に就けるかと相談に来た。

#### 経過

**当初の様子** 朗らかで明るいのが、数社応募してもダメだった経験で不安な様子があった。これまでに在学中からいろいろなアルバイトをしてきていたし、求職活動もやってきていた。こういう人が

どうして就職できないでいるのか不思議だと感じさせた。

**家族** 本人がしっかりしているので、家族の意見・意向を確かめる必要なし。

**支援者の数** 担当者1人

**支援者の見立て** 在学中に秘書検定2級、ワード、エクセル3級、硬筆書写技能3級を取得し、アルバイト経験も上手にしていることから、職業意識、職業観はしっかりしている。能力的にも何ら問題ないし、個別対応で早期就職が可能と判断。もともとの能力は高いが、自己の長所を採用面接で伝えられないこと、アルバイト経験をうまくPRに使う技術がないこと、求人の選定がヘタで応募が集中する競争率の高い求人に応募していることから、悪循環に陥っていると評価した。

**支援内容** 最近1年以内のケース。支援期間は約2ヶ月。まず、これまでの求職活動の内容・方法、アルバイト経験の有無を逆編年体方式で述べてもらった。アルバイトは職歴に入らないと誤解していたので、アルバイト経験も自己PRに役立つことを教示。

次回来所時には、履歴書とともに、アルバイトの経験内容や、自分の取り組み方、達成感を得たこと等のエピソードをまとめた棚卸しの書面を作成して持参するように指示。

来所時に持参した履歴書及び職歴書（簡易箇条書き）は良くできていたが、自己PRが控えめなので、それを指摘し自信を持って書くように注意し、添削した。

求人の選び方を指導し、未経験者可あるいは新卒者可の求人を選ぶ道があること、希望の条件をすべて満たさなくともまずは就職して実務経験を積んで次のステップアップを狙えることを説明する。未経験者可あるいは新卒者可という求人から希望に近い条件のものを選んで紹介。

**顛末** 相談開始後、最初の紹介で採用内定、就職。本人が内定後に来所し、深々と頭を下げて感謝の意を表明した。

### 支援のポイント

もともと能力が高い層であり、少しのアドバイスで大きな成果を上げることができたこと。具体的には、①何が職歴となるのかについての誤解を解いて、何が自己のPRとなるのかを教えたこと、②求人の選び方を助言したこと、③自己の長所を表現する書類の書き方を教えたこと、④①から③によって、就職のための戦術の総合的な軌道修正をしたこと。

### 事例52

**年齢** 24歳

**性別** 女性

**学歴** 大卒

**学力** 大卒程度

**来所理由** 今年の3月大学卒業。昨年は公務員試験を受けて失敗。家族から一度、安定所に相談にいらしてみればといわれた。今年も公務員になろうと考えているが、やる気が出ない。どうしたらやる気になるのかという。

### 経過

**当初の様子** 以前、水泳部にいて、今でもときどき泳ぎに行っているというし、体力面では問題ないが、6年かけて大学を卒業。夜は寝付けるが、朝の起床時に理由なく憂鬱な気分できなかな起きられない。公務員試験の受験勉強もやる気が出ないので手につかないという。小さい頃、同級生がサッカーに熱中しているのを見ても、そんなことをして何の役に立つのかを考えていたという。在学中にアルバイトを数カ所経験したことがある。

**家族** 親は公務員になれというが、親戚に相談したら進学してもっと勉強したらどうかという。祖母は、「人の話ばかり聞いていないで、自分で考えたらどうか」といつてくれる。

**支援者の数** 担当者1人

**支援者の見立て** 周囲の言うことに耳を傾けすぎるところがあり、主体性が乏しく、自分はどうしたいのかははっきりしない。初回来所時の様子から個別対応が必要と判断。初回から話している間に落涙するなどメンタルヘルスの面での問題を感じたが、とりあえず、何も手に付かず気持ちが空回りしている状態を変えることが肝要と判断した。

**支援内容** 最近1年以内のケース。1ヶ月で相談を中断。本人の状況から、初回相談は多くのことを聞かずに打ち切り、再度の来所を勧奨し、次回を約束。本人は「いろいろな話ができて少しスッキリした」とのこと。翌週に来所。高校と大学で今と同じように2年間落ち込んだことがあるとのこと。話を聞くことを中心に対応した。3回目は以前より多く話すようになり、ペットを飼っているとのことだったので、朝の散歩をすすめたところ、前向きな返事だった。メンタルヘルスの面で問題を感じていたので、専門医の受診をすすめたところ、考えてみたいとの返事があった。4回目は、本人の様子が前回よりも重い感じがした。専門医の受診について聞くと、「親から、そんなところに行ってしまうと病人にされてしまうので、絶対に行くなといわれた」とのこと。次回の相談を約束して帰ったが、その後、体調不良で来所できないとの連絡があり、以後来所していない。

**顛末** 支援を中断。

#### 支援のポイント

①本人の状態から就職の話に集中せずに、日常生活の話など本人が話すことを誠意をもってきいたこと、②医療的なケアが必要と判断し、その旨、本人に伝えたこと

#### 事例53

年齢 24歳

性別 男性

学歴 大卒

学力 大卒程度

来所理由 雇用保険受給者なので、就職が前提。

#### 経過

**当初の様子** 2月に来所。明るく人当たりが良いが、少し線が細い印象があった。大学卒業後、英会話スクールの営業を10ヶ月間経験している。離職して来所。もともと子どもが好きなので、子ど

もの英会話スクールの営業に就職した。しかし、会社の方針に合わないので退職したという。人と関わる仕事につきたい。求職活動をしてきて、いくつも応募したが決まらない。

**家族** 一般就職の経験もあり、とくに把握する必要なし。

**支援者の数** グループ制により3名で対応。

**支援者の見立て** 半年近く失業していることが不自然に思われるほど良い人のように思えたので、早期就職をしてもらいたいと思った。就職意欲はあるが、希望する職種など就職の方向が定まらない様子。「この仕事」という強い意志がないと感じた。求職活動をしてきて、何社も応募したのに決まらないため、少し就職意欲が薄れているようにみえた。応募する求人の内容に一貫性がなく、仕事の内容も会社の性格もばらばらで見栄えが良いところを狙っているようにみえる。

**支援内容** 最近1年以内のケース。約6ヶ月でトライアル雇用に入り、その後3ヶ月で就職。本人が選んだ求人について、相談窓口と一緒に検討した。選んだものをみるとやはり人と接する仕事が好きなように思われた。インターネットで求人会社の関連記事を検索するなど求人についての情報を集めて提供し、職務内容のはっきりしたイメージが描けるよう説明した。トライアル雇用制度が適用される求人があったので、その間（3ヶ月）だけでも行ってはどうかと進めところ、応募した。書類選考がなく、すぐに面接してトライアル採用となった。

**顛末** トライアル採用なので気楽に応募したとのこと。勢いで就職してしまったところもあるが、これ以上無職の期間が長くならずに良かったという。しかし、トライアル期間が終了した後のことは、その時になって考えたい。同族会社であることに疑問があるためだという報告があった。（トライアル採用期間3ヶ月終了後に常用雇用に移行し、正規採用されたことが調査実施後に把握された。）

### 支援のポイント

社会性はあっても職業情報は不足しており、希望や興味がはっきりせず、どこかフラフラしたところがあって、自分を売り込もうという考えもない。そのため、①求人内容を十分に説明したこと、②説明するためにインターネット情報までも集めて提供したこと、③トライアル雇用という柔軟な制度を活用したこと。

### 事例54

**年齢** 23歳

**性別** 女性

**学歴** 大卒

**学力** 高校2年程度

**来所理由** 大学を卒業後も仕事をしていない。就職したいが、どうしたものか、とにかく、じっくり相談したい。

### 経過

**当初の様子** 見かけは年齢よりも幼く感じ、学力の点、コミュニケーション能力に不安を感じる。

大学卒業時には、就職活動はしなかった。理由は在学中通学困難（不登校状態？）になり、4年に進級は出来たものの単位未取得により卒業が見込めなかった。ただ、4年次に単位は取得した。しかし、母親の病気の介護、祖母の介護、家事手伝いのため就職活動は出来なかったという。緊張して話をする（何かを発言すると家族から反論されたのではないか）。職業に関する資格は在学中にいくつか（社会福祉士、ホームヘルパー2級、日商簿記3級）とっていた。

**家族** 母親は病気がちであり、何も関わっていないようである。何かを発言すると家族から反論されるという意識があるようで、それが人に相談することに対して影響与えていると思われた。

**支援者の数** 1人

**支援者の見立て** 4人姉妹の3番目のためか、周囲に非常に気をつかう。自己主張ができない等自分の中にこもるようにみえた。就職をしなればという意識はあるものの、自ら積極的に働きかけという意識はない。年齢よりも幼く感じ、学力の点、コミュニケーション能力に不安を感じる。

**支援内容** 最近1年以内のケース。相談期間は約3ヶ月。状況や自分のことを自分で認識してもらうようにすすめた。生活習慣や趣味などについて話を聞きながら性格や興味などを把握して、約1ヶ月後からふさわしいと思われる求人进行提示し、それらの求人について説明をしていった。その過程で、本人が自分のやりたい職業を見出し始めた。ホームヘルパー2級の資格をもっていたので、一般求人から本人に合いそうな求人を探し紹介した。介護施設・通所施設へ相談員として応募し、ホームヘルパー（3交代）として就職。

**顛末** 介護施設・通所施設のホームヘルパー（3交代）として就職。本人は、初めての仕事で、しかも夜勤があるときいて不安を抱えてはいるが、就職が決まったと安心した様子で連絡をしてきた。

#### 支援のポイント

周囲に気を遣い、自己主張ができずに緊張して話をしており、しかもじっくり相談したいと申し出た本人の状態から、①生活習慣や趣味などの日常的な話をしながら本人の希望職種や興味等を把握したこと、②親身に相談を続け、本人にやる気をおこさせたこと、③自分で状況を認識し、自己理解をするように相談をすすめたこと。

#### 事例55

**年齢** 24歳

**性別** 男性

**学歴** 高卒

**学力** 高校2年程度

**来所理由** アルバイトや短期の仕事（パチンコ店、エステの客引き、運送会社、プールの監視人、花屋で1年間の正社員）はいろいろやってきたが、そろそろしっかりしたところに就職したいので職業紹介を希望。

#### 経過

**当初の様子** 就職活動はあまりしてこなかった。いろいろな仕事は経験してきたが、どれも長続き

していない。人と話す仕事には向いていない様子があった。

**家族** 不明。支援を行うに当たって家族の態度等はとくに問題にならなかった。

**支援者の数** 1人。じっくり相談することが必要と判断されたため。

**支援者の見立て** 人と話す仕事が向いていないのに、人と接する仕事をしてきている。適性に合わない仕事なので、経歴として「仕事はしてきたが長続きしない」ということになったと評価した。問題はそこにあり、職業についての知識も乏しいので、職業について情報を提供しながら、本人の適性にあった仕事を見つけることを支援することが必要とみた。

**支援内容** 1年以内のケース。支援期間は約3ヶ月。相談の過程で、職業適性について話し合った。求人をもとに、いろいろな職業について説明し、何をしたいのかを本人が自分で理解できるようにした。その結果、本人なりに自分のやりたい職業がわかりはじめた。求人にトライ雇用制度が適用できるものがあった。機械のオペレータの求人で製造員を紹介したところ、本人も納得して応募。トライアル雇用で採用になり、3ヶ月のトライアル期間を無事に終了した後、常用雇用に正式採用となった。定着している。

**顛末** 自分のやりたい職業がわかりはじめた。製造員でトライアル雇用の後に、その仕事で常用雇用に正式採用となった。

#### 支援のポイント

- ①本人の話を良く聴いて、短期間で離職を繰り返していた理由を適性に合わない仕事をしてきたからだを見立てたこと、
- ②見立てに沿って具体的な求人を説明する形で職業情報を提供したこと、
- ③適性にあったものかどうかをトライアル雇用で確かめたこと

#### 事例56

**年齢** 22歳

**性別** 男性

**学歴** 専門学校卒（整備士）、ただし、高校は1年で中退したあと、他校に入学し卒業。

**学力** 高卒程度

**来所理由** 就職したい。しかし、支援を受けなくても就職はできるとも言っていた。

#### 経過

**当初の様子** 求職活動は何もしていなかった。アルバイトもしたことがなく、働いた経験がない。何事にも自信がなく、自分が就職できるのか、もし就職できたとしても働き続ける事ができるのか、不安だという。対人関係では、高校時代からコミュニケーションに問題があったようである。目を合わせて話をする事ができないし、やっとの思いで安定所に来たようであった。

**家族** 家族は非常に心配している様子である。とくに母親が心配しすぎて、つい余計なことをいうようだが、父親は長い仕事経験からよく相談にのっている感じを受けた。しっかりした家庭環境の故に「しっかりしなくては」というプレッシャーがあり、身動きがとれなくなっていると感じた。

**支援者の数** 2人

**支援者の見立て** 学力など基本的な能力は高い方で問題がないと評価した。しかし、対人関係はうまくなく、何をすることも自信がない、他人と目を合わせて話をする事ができないほか、社会常識面で不足があるとみた。反面、整備士の資格をとるなど「ガンバリや」だと思われた。

**支援内容** 1年前から最近まで約1年間の支援を継続しているケース。本人に自信を付けさせることが重要なので、相談の中で自信をつけるように自分の能力ややれることに気づくようにした。支援を始めた頃、父親の紹介で1社に応募したところ、書類提出の際、Tシャツで行き、人事担当者から「その格好はひどい」と注意される。気に病むので、そのことばかりを気にしないように助言し、どうすればよいかを理解させる。

次に、周囲から助言されながら求人誌から探したり（2社）、安定所の紹介（4社（求人開拓をしたもの1社を含む））を受けて7社に応募したがいずれも不採用。このころは応募する職種に一貫性がなくいろいろなものに当たっていた。

その時期が過ぎると、自分から「これからは、自分で探して行く」と自立宣言をした。また、希望職種と労働条件がはっきり自覚できるようになった。現在は安定所の紹介で1社に応募して、結果待ちである。

**顛末** 安定所等を自分で利用して就職先を探せる自信がついた。自分のやりたい職種もはっきりしてきた。現在、応募中で結果待ち。だんだん自分に自信を持ってきている。

#### 支援のポイント

①基礎的能力はあるが、自信がないし、職業の経験・知識が乏しいことが本人の問題だと把握したこと、②①を考慮して親身に相談をし、相談のなかで自信をつけさせるようにしたこと、③希望職種と労働条件をはっきり自覚できるように情報を提供したこと。

#### 事例57

**年齢** 16歳

**性別** 女性

**学歴** 高校（定時制2年で中退）

**学力** 中学1年程度。漢字は良く知っているが、文章組み立て能力が劣る。

**来所理由** アルバイトを探しに来た。

#### 経過

**当初の様子** コンビニのアルバイトをしたことがある。生活のリズムがなく、夜、遊んでいるため、来所するのは、ほとんど夕方であった。求職活動はほとんどしておらず、安定所での相談だけだった。

**家族** 両親は離婚しており、本人は祖母といる。祖母は心配していたが、就職活動に特にかかわった様子はない。

**支援者の数** 3人（長期間の支援で、かつ、途中で一度中断している。）

**支援者の見立て** 夜、遊んでいて、生活習慣に問題があるほか、自分が何をやりたいのか、何を仕

事にすればよいのかわかっていないと見立てた。働くことがどういうことか、職業とはどういうものかについて理解させることが必要とみた。

**支援内容** 2年前からのケース。支援は途中10ヶ月中断。職業相談を重ねた。生活習慣を確認し、現在の雇用状況等について説明した。職業紹介はしていない。働くことがどういうことか、職業とはどういうものかについて説明し、就職するにはどうしなければならないかを説得した。そのなかで、自分のやりたい職業を見出すようにした。

**顛末** 自分のやりたいことを自分で考えるようになり、現在では、介護系の仕事に興味をもっている。介護系の仕事は資格が必要なことを理解して、就職実現に向けて勉強しようとしている。

### 支援のポイント

①本人の年齢、状況を考慮してすぐさま求人を紹介せずにじっくり相談をしたこと、②本人に対して職業理解をしてもらったための説得を継続したこと

### 中断期間等

平成16年9月1日から1年程度相談、平成17年9月から18年6月まで中断

平成18年6月13日から相談開始

### 事例58

**年齢** 18歳

**性別** 男性

**学歴** 高校3年在学

**学力** 高校3年程度

**来所理由** 学校の教師から相談の依頼があり、教師が同行して来所。卒業時の就職が学校紹介では決まらない。高校の進路指導では対応しきれないので、なんとかして欲しいという、教師の依頼であり、本人も就職を希望していた。

### 経過

**当初の様子** 欠席もなく学業に取り組んでいた。コミュニケーション能力に問題があり。声が非常に小さく震えているため聞きとりにくい。新聞配達のアルバイトはしたことがある。学校紹介で3社応募して不採用だった。自信をなくしている様子だったが、就職活動には積極的であり、働くことに対する意欲があった。

**家族** 応募先の選択に過剰に口を出し、本人の考えを妨げているようだった。

**支援者の数** 2人。うち1人は学校の教師で面接会や応募先に本人に同行。

**支援者の見立て** 家族が干渉することで、本人が自分の考えで職業を選択することができず、やりたい仕事は何なのかわかっていない。さらに、これまでの学校紹介で失敗したので自信をなくしており、本人は、自分の希望や意思を人に伝えられなくなっていると感じられた。しかし、働くことに対する意欲があるとみられた。そのため、自信をつけて、希望職種をはっきりさせることが必要と判断した。

**支援内容** 1年前のケース。支援期間は約2ヶ月。まずは、本人の考えを良く聞いた。そして、学校と安定所は同じことをいったりしたりするところではなく、違うのだということを知ってもらった。萎縮した気持ちをほぐすように心がけながら、求人をもとに職業情報を提供し、自分のやりたい職業を見出せるようにした。

就職面接会の時期になったので参加させた。当日は本人を萎縮させないために、会場とは別の場所に連れて行って、教師の指導とは別に個別に相談する機会をもち、自信を付けるような声かけをした。

面接会の後に、面接会で接した事業所に紹介し、内定を得た。

**顛末** 就職面接会で接触した事業所に応募し就職した。

### 支援のポイント

①自信がなく、家族からはいろいろ言われ、教師からは厳しく指導されて萎縮しているので、相談過程で自分のやりたい職業を見出せるように情報を提供し、自分を理解させたこと、②就職面接会に教師が同行して「黙っていてもダメだ」と指導するので、本人を別室に案内して相談する機会を作り、本人に自信を付けさせ、今出来ることを精一杯しようという意識を持たせたこと、具体的には、萎縮しないように、「面接会では何をいってもよいのだよ。言葉でいえるようにしよう」と説得したこと、③就職面接会に参加させたこと。

### 事例59

**年齢** 15歳

**性別** 男性

**学歴** 中卒

**学力** 中学校卒業程度。本人によれば中学時代の成績は中の下。

**来所理由** 中学校を卒業したが就職していない。就職したい。

### 経過

**当初の様子** 在学中に安定所の巡回相談の際にも対象となっておらず、卒業後も学卒未就職の扱いになっていなかった。7人兄弟の長男。

在学中に高校に進学したかったが、家庭の経済的事情から県立でないとダメと言われたが、合格しなかった。中学を卒業して、4月に就職したいので求人を紹介してほしいと職業相談窓口に来た。「高校をもう一度受験したい。学費を稼ぐために働きたい」とのこと。

下を向いて、ほとんど話さない状態で、人におびえている様子があった。家族状況に問題があるとみた。自分の思いを相手に伝えるように話せないという面でコミュニケーション能力に問題がみられた。

**家族** 本人が人に怯えて十分に話せないなどの様子から家族状況に問題があるとみられた。

**支援者の数** 実質1人が担当。若年者支援の窓口の専門職員が全行程を担当。ジョブサポーターが面接等に同行。

**支援者の見立て** ①人におびえている様子から、家族状況に問題があるとみた。そのため、まずは、カウンセリングの傾聴のように、話を聞くことが必要と判断した、②このままでは、企業の採用面接に行っても話ができないので、就職は難しい。しかし、真面目な性格なので、仕事はできそうだと評価した、③その判断による対応である程度心を開かせることはできた、④人に怯えて話せないことは、就職できても就職後の定着が心配。

**支援内容** 最近1年以内のケース。支援期間は約2ヶ月。本人の話を良く聞いて怯えをとりのぞくとともに、中卒求人を探す。いくつか紹介するが、なかなか決まらず2ヶ月が経過。その間、本人は毎日来所して、求人を探し相談をする。家族も「早く就職してほしい」というとのこと。障害者雇用を積極的に行っているような事業所に、「面接だけでもお願いしたい」と安定所から依頼。ジョブサポーターが同行して面接に行き、採用になる。クリーニング業である。面接に際して、本人は高校に進学したいとの希望があることを伝える。事業主は本人の希望があることを了解し、進学することになってもよいし、あとは本人次第と伝えてくれている。

**顛末** クリーニング業に就職。就職して2、3週間後に職場定着指導にいったところ、元気そうにしていた。職場の雇用管理担当者から様子をきくと、「本人が中学時代に野球をやっていたと言ったので、休み時間にキャッチボールに誘ったら、急に明るくなった」とのことであった。

#### 支援のポイント

①家族関係から人に怯えることで人と話すことが不得手なのだと判断して、怯えを除去するように本人の話をじっくりきくことから始めたこと、②本人の長所が真面目な性格であり、仕事を真面目にするであろうと評価したこと、③それらの判断と評価に基づき、具体的に本人の条件（この場合は学歴に注目）にあった求人を探し、そのなかから、さらに本人の状況を理解し、受け入れられる雇用管理能力があると予想される事業主を選定したこと、④本人の状況を明らかにして、求人者に面接を依頼したこと。

#### 事例60

年齢 15歳

性別 男性

学歴 中卒

学力 中卒未満。学校をほとんど欠席している。イジメも受けたことがあり、登校しても保健室に行くことが多い。自分の意思を相手に伝えるコミュニケーション能力には難がある。

来所理由 4月に来所。学校を卒業したが就職していない。就職したい。家で料理をしていたし、調理関係の仕事をしたいとのこと。父も以前は調理人だったとのこと。

#### 経過

**当初の様子** 4月に来所して就職したいというが、以前、安定所が在学中の巡回相談で学校に行っていたところ、教師から状況説明があり、「親から離さないといけない。住み込みで就職させたい」と相談があった。本人も、住み込みは異存なかった。礼儀正しいし、挨拶がきちんとできる。

**家族** 父子家庭。2人兄弟の上。生活保護世帯。父は家族に対しても乱暴な態度で、子どもとの関係もうまくいっていない。本人の在学中には学校に怒鳴り込むなどトラブルがあり、本人が学校にそれを詫びるといいう状況があった。生活保護費との関係では、父が本人の就職をどう考えていたか懸念されるところがある。

**支援者の数** 主として1人だが、チームで対応。

**支援者の見立て** 本人は真面目な人柄で礼儀正しく挨拶もできるので、就職可能。調理関係の仕事を希望することには、父も以前は調理人だったことが影響しているかもしれないが、いずれにしても選択できる職業の幅は狭い。

**支援内容** 最近1年以内のケース。支援期間は中断を含めて約5ヶ月。本人が真面目なことを見込んで、住み込みの調理関係の求人を探す。他安定所の受付求人該当するものがあつた。調理助手であつた。本人と一緒に支援担当者が同行して事業主に希望と状況を説明する。事業主は大いに困惑したものの、最終的には本人をみて採用した。5月には就職後の定着指導で連絡すると、「元気でやっている」とのこと。6月に事業主から「本人がいなくなった」と連絡がある。探す事業所の近くにおいて事業主が連れ戻す。失踪した理由は、寂しいことと仕事がつらいことだつたと思われるので、本人に就業継続の意思を確認すると「頑張る」とのことであつた。8月に事業主から「また、いなくなった」と連絡あり。1週間ほど行方不明だつたが、探す事業所に家に戻つていた。勤め先から50kmくらい歩いて帰つてきたといひ、「もう、これまでのところの仕事はできない」と話す。事業主は本人の申し出を了解した。また、「本人がよければ、再度、働きに来てよい」と理解を示した。安定所としては「しばらく考えてまた相談に来てください」と伝えた。そのまま時間が経過してゐるので、事業主との関係も続くかどうかわからない。

**顛末** 職場定着できずに離職し、また、生活保護世帯の一員となつてゐる。

#### 支援のポイント

①家庭の状況を在学中に教師から聞いていたことで、求人を選定の幅を絞つたこと、②事業主に職業紹介者として本人の状況を説明したこと、③就職後の定着指導を行つたこと、④事実上の離職をした後も、一定の配慮をしながら再度の相談を待つてゐること

#### 支援の課題となつたこと

個人の家庭の中には踏み込めないことから、対象者本人に対する家族の意向や影響を整理しきれないこと。対象者の就業自立と他の家族員との問題。

#### 事例61

年齢 15歳

性別 女性

学歴 中卒

学力 小学校高学年程度。

来所理由 4月に進学したかつたが県立高校にいけなかつたので、就職したいと来所。ただし、安

定所としては、本人の状況は在学中の巡回相談（前年11月）で把握していた。求職活動は卒業後に始めた。

### 経過

**当初の様子** 中2で転校してきた。母子家庭。前の学校では転校生であることや兄が障害をもっていることなどからイジメにあい、不登校。転校後は登校しており、出席状況に問題はない。本人は本を読むのは好きだが、同年齢の友人はいない。自分を表現するのがヘタ。誰にでも話ができるということではなく、話せる人が限定されるようなので、相談するのはジョブサポーター1人にした。

就職を自分の問題として捉えていない様子だった。どんな仕事をしたいか、どんな仕事ができるのかわからない状態で、働く段階に達していない。

**家族** 母が同行して来所。母の意向で調理助手はどうかということだった。

**支援者の数** 直接本人に接するのは1人。

**支援者の見立て** 就職は必要。しかし、どんな仕事をしたいか、どんな仕事ができるのかわからない状態で働く段階に達していない。本人に未熟さがあるので、本人に就職についての意識をはっきり持たせることが必要。

**支援内容** 最近1年以内のケース。支援期間は実質約5ヶ月。本人に直接接する担当者を1人に限定した。本人に就職についてはっきり意識するように働きかけながら、中卒を受け入れる求人を探す。求人があると連絡して来所させ、採用面接の仕方等きめ細かく助言し、面接に行かせるがなかなか決まらない。4月以降、何回も求人を探し→呼び出し紹介→面接→失敗を繰り返したが、漸く8月に弁当店に就職。その後は定着している。

**顛末** パートで自宅近くの弁当店に就職。現在まで定着している。

### 支援のポイント

①本人に未熟さがあり、自分で就職活動を十分にできないので、具体的な就職活動の細かい段取りを支援者が行って行動させたこと、②在学中に学校で職業適性検査等を実施していたほか、在学中から本人情報のある程度得ていたこと、③本人が特定の人としか話せないで、直接本人に接する担当者を1人に限定したこと

### 事例62

年齢 23歳

性別 男性

学歴 大卒

学力 大学卒程度

来所理由 4月に卒業したが就職していない。就職したい。

### 経過

**当初の様子** 誠実な感じで、どこもとくに問題がありそうにない。どうしてこういう人が就職できないでいるのか不思議と感じる状況だった。

**家族** 自立しており無関係。

**支援者の数**

**支援者の見立て** 誠実さがあり、学校卒業時及びその後と、何故就職できないでいるのが不思議。機会を提供すればもちろん就職するとみた。

**支援内容** 最近1年以内のケース。支援期間や約6ヶ月。結果待ち。まだ、学校を卒業したばかりなので、学卒求人も視野に入れて探す。事務系を探したところ、銀行の求人で「一般」と「新規学卒」の両方を出しているものがあつた。まず、「一般」に応募することで紹介したところ、事業主の方から「新規学卒」で応募してはどうかと助言された。10月中旬に新規学卒扱いとして企業訪問をしたところ、応募書類を受理されたので受験する。おそらく成功するであろう。

**願末** 新規学卒として再挑戦。結果待ち。

**支援のポイント**

未就職であっても、率直に本人の良さを評価してそれに見合った求人を探したこと。

## < 参 考 >

本研究の調査を行っている過程で、若年者支援を行う職業紹介担当者等が、日頃、若年者不安定就業問題について感じている率直な思いを聞くことができた。本研究の全体の結果の考察に重要な意味を持つきわめて含蓄の深いものだと考えられるので、以下に参考として提示する。何らかの整理をして形を整えるよりも、もとの情報に近い形で理解の幅を広げられる方がかえって情報としての正確さを増すと思われるので、内容ごとのグループ分け等をせずに、それぞれの表現を簡潔にするだけにとどめた。

### 支援担当者の助言等

- ・若年者支援団体がいくつもある。それらの団体が、無業や不安定就業の若年者の立場としての発言をすることがしばしばある。しかし、雇用問題は雇用する側と就職する側、あるいは、求人者と求職者の両方があって成り立つものだという事を踏まえていないと就職支援の効果はあがらない。
- ・若年者支援団体等が安定所の公開求人を利用しにきているようだが、ただ、黙ってみていただけだ。安定所の職員に一言でも何かいってもらえれば、その場で実のある連携が出来るようになるのだが、残念だ。
- ・学校では、卒業を控えて就職が決まらない生徒がいるときには、安定所に早期にその状況を連絡することが強く望まれる。その際、とくに、進路指導担当の教師は、生徒本人の前で、安定所に電話して、本人の就職支援を依頼することが生徒と教師の信頼関係を厚くすると思われる。生徒は、教師が安定所に自分の就職を、一所懸命頼んでくれているということが実感される。そして、その後、自分から安定所に相談にやってくるのが容易になる。
- ・親がまだ世間体を気にする傾向が強い。ブランド校に通って、アルバイトをするなら、家から離れたところでやってほしいなど。子供の言うことを聞かないで親の都合や意見を押しつけるということが結構多い。もっと、子供をほめてやってはどうか。
- ・ともかく、来所して相談することが就職への近道。「ちょっと相談したいのですが・・・」、「ちょっと話をききたいのですけれど・・・」というような言葉を受付にってもらえるとよい。
- ・「ちょっと話を・・・」といえるように、就職問題に直面するもっと以前の小・中学校、高校の頃に社会見学として来所して、求人検索機などを体験してみるとよいであろう。無邪気な経験の記憶が受付で相談を求めやすくさせられると思われる。
- ・希望職種がわからないというよりも、社会にはいろいろな仕事・職種があるということを知らない者が多い。求職票の希望職種の欄が空欄の者は少なくない。
- ・どういう仕事に就きたいのか、就けばよいのがわからない若年者は多い。それでいて賃金、休暇や労働時間などの労働条件についての希望ははっきりしている。

- ・小グループ制で対応しているが、若い人など配慮が必要な人には「次回も私のところに来てください」ということが多い。いろいろ考えて若年者コーナーは特に作らないでいる。
- ・正社員にこだわる者が多いが、派遣労働でも、パートでもまず就職して、実務経験を積んでそれをメリットに正社員に挑戦することもできる。
- ・若年求職者は総じて口数が少なく、下を向いている感じがある。
- ・求職者の話は良く聴くことが必要。外見や話の途中で判断できない。決めつけられない。
- ・支援者の要件としては、キャリア開発の理論を知り、支援の理論に基づいて実践技術を習得していること。また、職業についての知識を有すること。
- ・当面、生活に困っていないので、どうしても仕事をしようという気持ちが薄い若年者が少なくない。それらの者にはカウンセリング的な相談をしている。
- ・職業意識がそれなりの水準に達している者には、履歴書の書き方、面接の心構え・受け方について指導している。
- ・若年者の求人倍率は他の年齢層よりも高く、求人は多いし、希望すれば応募は可能であるが、経験・能力・常識不足等の理由により不採用になる場合が多い。「すぐ使える人材」ということに対応できないという面では、若いことは、逆にネックになっている。
- ・支援を担当した地域の求人倍率は全国屈指の高さ。若年者雇用の状況も悪くない。求人倍率や就職件数とみると、むしろ、34歳以上が厳しい。
- ・いよいよ困ってから安定所の相談窓口に来る。それまで他で相談してはいるのだろうが。
- ・「派遣労働」が企業にとって効果的な調整弁となっているのは事実だが、若年者自身も全体の雇用が正社員だけでなくなくなっているという、そういう環境変化にどれほど気づいているのか疑問がある。
- ・正社員にこだわって就職できずに無業でいるのではなく、とにかく就職して実務経験を積むことは有利になる。それをプラス材料にして正社員を目指すという考え方は重要。
- ・支援者の要件としては、カウンセリング能力、職業紹介の専門性があり、地域事情を把握することが必要で、人の話を良く聞けることが重要。
- ・支援者の要件としては、専門性を向上させて、本人の情報収集ができること。
- ・支援者の要件としては、幅広い知識と専門的な支援技法をもつこと。
- ・就職の明暗を分ける要因は、ステロタイプをあげられないが、自分だけで自己検索機で（＝機械相手に）求人探しをしているのではなく、とにかく、窓口で相談をすること。相談することで情報が増え、自分だけの見え方、考え方の狭さを広げることができる。
- ・事業主は不採用の理由として、「意欲が感じられない」、「元気がない」をあげることが多いので、そう見られないことが大切。
- ・就職についての意識が十分な人は、窓口で相談して、そこでの助言を得て行動するので短期間に就職に成功する。
- ・事業主は、基本的には即戦力を求めているが、新規学卒にはそれは求められないことを

知っていて、将来性をみるといっている。とくに「元気があって職場を盛り上げる人」、「自分の意見をきちんといえる人」、「挨拶ができる人」ということは共通して望まれるもの。

- ・「ちょろっと相談コーナー」という窓口を設けているので、自己検索機を利用した後、相談してはどうかと若い人に声をかけるが応じない。しかも、求人については、内容がほんのちょっとでも気に入らないとまったく考慮しようとしなない。仕事探しの段階でないとと思われる人が多い。
- ・自分にあった仕事とか、希望の仕事といっても「仕事」というものの考え方がかなり漠然としている傾向がある。求人があっても自分に力がなければ結びつかないという基本的なことが理解されていないことがしばしば見受けられる。
- ・就職するには、視野を広げて、思いこみでなく情報を得て考えるようにすることが必要。
- ・(求人が少なく雇用情勢が厳しい) この地域では、派遣で働いていたことは正社員求人の応募にとって有利になるとはいえない。
- ・公務員、教員、国家資格職業を旨としてなかなか成功しない人は、求職活動を一切やってこなかったという場合が多い。どうしようか、ほかに就職はないかと口ではいうが、紹介・相談をしても、実際には真面目に求職活動をやらないことが多く、未練を引きずる。どうするのですか、といってもはっきりしない。就職支援の立場からみると来年までとか何歳までとか、いつまで受験するかをはっきり決めていた方が良いと思う。



か（合計\_\_\_\_人）、それとも担当を他の方から引継ぎ（交代）を受けたり、途中で他の方に引き継いだのですか。

(1) 1担当者が複数の時、担当者間の役割分担はしたのですか。

(2) あなたご自身は、どのようなお仕事や活動をされている方ですか。進路指導などの若年者支援の問題に関することに関わったことや、ご専門をお持ちの方ですか。それらの経歴や経験は支援に役立っていますか。

(3) あなた以外の方は、どのようなお仕事や活動をされている方ですか。進路指導や企業経営などで職業問題との関わりを今まで持ったことがある方ですか。

(4) あなたが支援者となった動機、支援活動に参加した理由はどのようなものですか。

### 3. 支援の内容について

(1) 支援はいつ頃からどのくらいの期間なされたのですか。本人への支援が中断したあと、再開された場合は合算してください。**注：何年年月か具体的にわかればその年と月を教えてください。**

最近1年以内から\_\_\_\_\_くらい（中断期間と中断回数は\_\_\_\_\_）

1年以上前からだが2年以上前ではない頃から\_\_\_\_\_くらい

（中断期間と中断回数は\_\_\_\_\_）

2年以上前からだが3年以上前でない頃から\_\_\_\_\_くらい

（中断期間と中断回数は\_\_\_\_\_）

3年以上前からだが5年以上まえではない頃から\_\_\_\_\_くらい

（中断期間と中断回数は\_\_\_\_\_）

5年以上前から\_\_\_\_\_くらい（中断期間と中断回数は\_\_\_\_\_）

(2) 支援開始のいきさつはどのようなことでしたか。どのようなことから支援が始まったのですか。

(3) 支援の内容とすすめ方について順を追ってお話下さい。次の事柄を参考にしながらお話し頂ければ良いと思います。

(参考)

- a. 支援の具体的な内容・方法（どういうことをしたのか）
- b. 支援する上で問題となったことや困難だったこと。また、その問題や困難の解決はどのように対処したか、それらは解決したか
- c. 危機管理、危険防止等はどうであったか
- d. 支援を進める際の支援者の考え方、感じ方（支援方針や活動のすすめ方をどのように考えていたか、対象者をどのように評価した（見立て）か、その評価（見立て）は支援のなかで変わったか、困難に出会った時にどのように思ったか、感じたか）
- e. 他の支援者同士や、関係機関などとの連携・協力はあったか
- f. 団体の事務局や責任者からの助言はあったか
- g. 求人者や企業の人々とはどのような経路で出会ったか

- h. どういう手段で職場実習、職場見学、求人探し等をしたのか
  - i. 職業紹介(求人者の紹介・斡旋)はいつどこでうけたのか
  - j. 職業紹介に当たっての相談等はどのように行われたのか(誰から、いつからどの期間、そこでどういう見立てで、就職を目指してどういう措置(職場実習等)が行われたか、最初の見立てはその後変わったか)
  - k. 職業紹介を受けた結果はどのようなものであったか(就職したか、就職後に職場適応はしたか)
  - l. その他(支援に関連することで、本人や団体、他の支援者に関わることなど何かあれば)
- (4) 支援の結果、どのようになりましたか。支援を継続中の場合は、どのような状況ですか。
- (5) 支援の成果はどのようなものだとお考えですか。
- (6) 支援のための技術や知識などで、あなたご自身をもっと向上させたり身につけたりする必要があると思われるものはありますか。あるとするとそれは何ですか。
- (7) 望ましい支援者の条件とは、どのようなものだと思いますか。
- (8) そのほか、気がついたことや感想など、なんでも結構ですからお聞かせ下さい。

## 2-2 団体に関する調査項目

### お聞かせいただきたいこと

貴団体についてお伺いします。質問は1から5まであります。ただし、その中で、貴団体の紹介パンフレットや定款等の資料に、その質問への回答と同じ内容が記載されているものについては、それについてはそれらの資料を頂戴することでお答えとしていただいても結構です。

#### 1. 設立の目的、発起人、発足時の代表者など設立の経緯はどのようなものですか。

- 1-(1) 設立の時期はいつですか。
- 1-(2) 若年者支援問題を扱うようになったのはいつからですか

#### 2. 現在の団体の構成について伺います。

- a. 代表者はどういう方ですか(代表者の主たる経歴)
- b. 事務局や部門などの組織はどのようなものがありますか。
- c. 常勤の役職員数
- d. 活動目的・方針
- e. 若年者支援以外の活動はどのようなものに取り組んでいますか。
- f. 貴団体には、事業運営に関して公的機関や民間企業、商工団体等からの援助や連携協力の関係がありますか。
- g. 若年者支援事業に関しては、職業的自立援助(就業援助)のほかにも取り組んでいるものがありますか。

- h. 若年者支援事業に関しての公的助成を受けていますか。それはどのようなものですか。
  - i. 若年者に直接サービスをするサービス実施者の配置状況（全体で何人の人が実施者になっているか、常勤職員がやっているのか、ボランティア活用か、専門家を団体固有のネットワークに入れているか等、どういう人をどのように確保しているか）
  - j. 職業相談、職業紹介、職場実習等の直接的に職業自立支援に関することで公的機関との関わりはどのようなものがありますか（連携先の数と種類、職業紹介機能との関係の有無）。
3. 職業的自立に関する支援を受けるには、若年者はどのようにすればよいのですか（申込み方法等）
  4. 若年者支援については、どのような具体的な目標、あるいは成果を目指していますか。貴団体にとって支援の成果とはどのようなものでしょうか。
  5. 優秀な支援者を確保するためにどのような工夫をされていますか（たとえば、支援者同士の学習会の実施、研修の実施、専門機関との情報交換などやっていることがあれば）
    - 5-(1) 支援者が貴団体に所属・登録されて活動されている期間はだいたいどのくらいですか。あるいは短期間のうちに活動をやめる方は多いのですか。
  6. 支援者としてはどのような方が望ましいとお考えですか。あるいは、どのような方に支援者になっていただくのがよいと思われますか。
  7. その他若年者支援事業に関してお考えのことや感想などなんでも結構ですので、お聞かせ下さい。

---

労働政策研究報告書 No. 79

若年者就職支援の取り組みと方向

—支援モデルと望まれる支援者像—

定価：1,260円（本体1,200円）

発行年月日 2007年3月20日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井 4-8-23

（編集） 研究調整部研究調整課 TEL:03-5991-5104

（販売） 広報部成果普及課 TEL:03-5903-6263

FAX:03-5903-6115

印刷・製本 株式会社相模プリント

---

©2007 ISBN 978-4-538-88079-2 C3336

\*労働政策研究報告書全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)